Juntos desde hoy

오늘부터 함께

Desde hoje juntos

mulai hari ini ada kami

сегодняшнего дня вместе

多文化の子ども達に関わる人のための実践アイデア集

今日からいっしょに

ចាប់ពីថ្ងៃនេះមកទៅ

Өөдрөөс хамтдаа

Từ hôm nay cùng

从今天开始一起

作成：地球っ子グループ

地球っ子クラブ 2000 ・ 多文化子育ての会 Coconico ・ あそび舎てんきりん

目次

はじめに ・・・P1
（1）外国にルーツを持つ子どもに関わる人々
（2）この教材について

第1章 日本を支える子ども達 ・・P3
1－1．外国にルーツを持つ子どもとは？
1－2．日本語だけじゃない！ 外国ルーツの子どもが日本で成長していくための支援とは？

第2章 同じって嬉しい！ 違うってたのしい！ ・・P7
2－1．おんなじ！ 違う！ を楽しむ力がつくゲーム
2－2．多様性と多文化共生

第3章 すべての子どもがいきいきと成長できる学校・地域を作るために ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P12
3－1．外国ルーツの子どもの気持ち・親の気持ち
3－2．関わるすべての人が共有すべき知識・態度

第4章 今日からいっしょに！ ・・・P27
4－1．多様性を活かしたクラス作りのヒント
4－2．自分の言葉で主役になれる ～子ども達の言語にスポットを当てた活動～
4－3．クラスでの学習に参加できることを目指して
4－4．日本語指導のヒント ～「しかけ」のある日本語指導へ～

第5章 多言語おはなし会の紹介 ・・P42

第6章 やさしい日本語・やさしい学校 ・・P45
6－1．やさしい日本語
6－2．翻訳ツール
6－3．やさしいつもりの日本語
6－4．やさしい日本語の耳
6－5．やさしい日本語の工夫

第7章 指さし会話帳～学校版～ ・・P52
7－1．最初に確認しなければならないこと
7－2．学校に編入する際に必要な物 ～指さし会話帳・学校版～
7－3．学校生活の流れについて ～事前に伝えたほうがいいこと～

あとがき ・・・P59

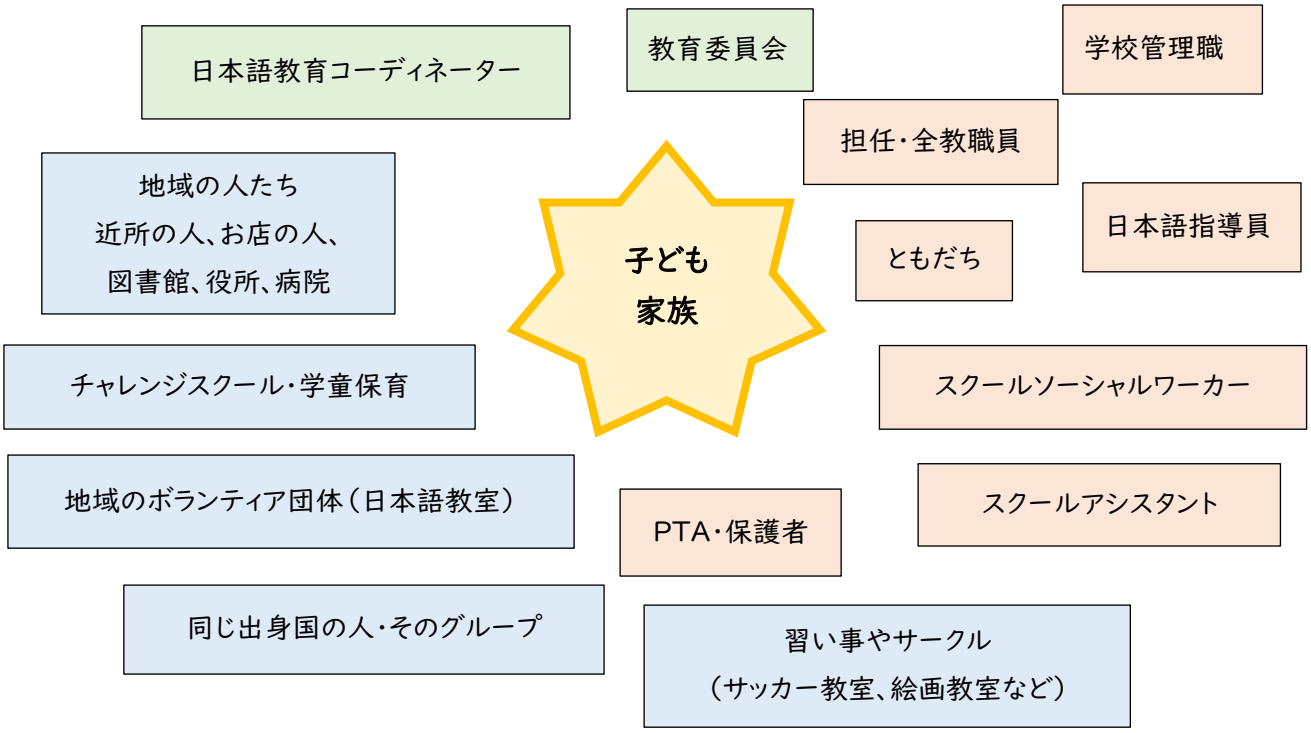
はじめに

（1）外国にルーツを持つ子どもに関わる人々

外国人受け入れが進む中、2019年3月に文部科学省から「外国人児童生徒受け入れの手引き」改訂版が出されました。外国にルーツを持つ子ども達が、日本の学校で本来持っている力を伸ばしていくために、彼らに関わるすべての人たちが連携していくことの大切さが示されています。

では、文科省「外国人児童生徒受け入れの手引き」に書かれている「外国人児童生徒」に関わる人とは、どんな人のことを言うのでしょう。下の図をご覧下さい。一人の子どもを支えるには、これだけの人たちが必要です。（「外国人児童生徒」「外国にルーツを持つ子ども」という用語については、第1章で述べます。）

<外国人児童生徒に関わる人とは>



これを見ると、あなたご自身も外国にルーツをもつ子どもに関わる立場であることに気づいていただけると思います。

あなたも、その子どもを支える大切な一人です！

児童を取り巻くこれらすべての人が、子ども達一人ずつの違いを理解し、その子にあった言葉や文化に対する配慮ができるようになることが大切です。そのうえで、お互いが連携し、子どもに対する対応を共有することで、余計な混乱を起こさせることなく、より効果的な支援が生まれます。

（2）この教材について

私たちは、外国にルーツを持つ子どもやその家族と一緒に活動する中で、たくさんのメッセージを受け取ってきました。その中には、彼ら自身の努力だけでは解決しえない課題もたくさんあります。周りに理解者が増え、学校や地域が変われば、子ども達の環境はずっと心地よいものになります。

そこで私たちは、令和元年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業で文化庁から委託を受け、その子ども達や保護者を支えるすべての人に向けて、この教材を作りました。

本書では、子ども達や保護者から受け取ったメッセージを紹介しつつ、子ども達の持っている良さを取り入れた活動を紹介していきます。

外国にルーツを持つ子どもたちへの日本語や学習については多くの本が執筆されています。そのような本で基本的なことを学ぶのはもちろん大事なことです。しかしそれは、すべての子ども達に同じように使えるものではありません。一番大切なのは目の前の子どもやその保護者をよく知ることです。本書には具体的な例も載せていますが、一人ひとりの子どもに合わせて、それぞれの発想力で、よりよいものにしてください。

子ども達と一緒に活動し学び合うことで、彼らが決して支援の対象だけではないこと、まわりの子ども達にとっても視野の広がるチャンスになることに気づくでしょう。

もちろんすべて読んでいただきたいのですが、必要が迫っている場合は、まずは目次を見て、自分の興味・関心に一番近い章から目を通していただいてもかまいません。今すぐ必要がない場合でもお時間がある時に少しずつ読み進め、ご準備いただければ幸いです。

2020年3月

地球っ子グループ
地球っ子クラブ2000
多文化子育ての会 Coconico
あそび舎てんきりん

第1章　日本を支える子ども達

　すべての子ども達はそれぞれにあった教育を受ける権利があります。「すべての子ども」の中に、もちろん外国ルーツの子どもも含まれます。

　しかし、日本語ができない状態で、日本の学校に通う子ども達が心地よく過ごせるような受け入れ体制はできているでしょうか。子ども達は学校で日本語を学ぶと同時に、日本語で学んでいかなくてはいけないのですから、当然配慮が必要です。

　繰り返しになりますが、どこの出身であろうと

日本で生活している子どもは、将来の日本を支える子どもです。

　その大切な子ども達を、私たちは責任をもって育てていかなければなりません。

1－1．外国にルーツを持つ子どもとは？

　今、様々な背景を持つ子ども達が日本で暮らしています。

【両親が外国人で家庭の都合で日本に来た子ども】

　家庭の都合は仕事、難民申請、留学等いろいろあります。子どもは自分の意思で日本に来たわけではありません。日本で生活することを受け入れるまでに時間がかかることがあります。

【国際結婚家庭の子ども】

　例えば、日本人のお父さんと外国出身のお母さんの国際結婚の場合、日本生まれで、日本の名前を持ち、外見も日本人で、普通に日本語を話す子どももいます。その場合、家での言語環境によっては、日本語での会話はできても、学習に耐えうる日本語力が付いていないということがあり、そのような子どもは増加傾向にあります。

【親の再婚で日本に来た子ども】

　親が先に来日していて、あとから子どもだけ呼び寄せる場合も多いです。

【両親が日本人で外国で育った子ども】

　両親は日本人なので、一見、日本語や日本の生活面で問題がなさそうですが、考え方や習慣などは育った場所に影響を受けています。「帰国子女」と呼ばれる子ども達もここに含まれます。

このような背景を持った子ども達が、外国にルーツを持つ子ども達です。

外国籍の子どももいれば、日本国籍の子どももいます。

外国生まれの子どももいれば、日本生まれの子どももいます。

そして、その中には言葉や文化について特別の配慮が必要な子ども、日本語指導が必要な子ども、学習支援が必要な子どももいます。
すでに日本語で会話ができるようになった子どもは、日本語の会話での問題点が見られないので周りから特別な配慮は必要ないだろうと思われがちで、本人の困り感が見落とされることもあります。

そのような子ども達を前に、私たちはどのようなことを意識したらいいのでしょうか。

外国から来た子どもは、言葉の違う国に来たのですから、当然、日本語の力はありません。言葉のわからない学校に来て、「何もできない子」になってしまったように感じ、自信を失う子どももたくさんいます。でも、日本語の力でその子の能力を見ないでください。日本語ができないだけで、能力がなくなったわけではありません。年齢相応の教育が受けられるように、また、得意な分野では、活躍できるように周りの協力が必要です。算数が得意、理科が得意、図工では色彩がとてもきれい、運動神経抜群、中国の故事成語に詳しいなど、それぞれの子どもが持つ得意な面を見つけ出すことはできるはずです。
大切なことは、彼らは、「お客さん」ではなく、日本で成長し、日本を支える子ども達だという視点を持つこと。将来、生活の場が日本以外になっても、日本を支える存在であることに変わりはありません。

これらの多様な背景を持つ子ども達にはいろいろな呼び方があります。
「外国人児童生徒」「日本語指導が必要な児童生徒」「複言語環境で育つ子ども」「多文化の子ども」
「外国籍児童生徒」「日本語指導が必要な子ども」「日本語を母語としない子ども」などなど

「外国ルーツの子ども＝日本語指導が必要な児童生徒」ではありません。もちろん、「日本語指導が必要な児童生徒＝外国籍」でもありません。
この本では、その子ども達のことを「**外国ルーツの子ども**」または「**多文化の子ども**」という言い方をします。文脈上問題がなければできるだけ「**子ども**」を使います。日本人の子どもと外国人の子どもを分けて考えているわけではありませんが、便宜上、このような表現を用いることをお断りしておきます。

1－2. 日本語だけじゃない！ 外国ルーツの子どもが日本で成長していくための支援とは？

学校で、
・「外国の子だから、できなくても仕方がない」と放置されていることはありませんか？
・「外国の子だから」と、お客さん扱いされていることはありませんか？
・日本に来たばかりの子なのに、日本の子と同じ基準で評価をしていませんか？
日本語がわからないためにコミュニケーションが十分とれないことが大きな壁になっていることは事実です。でも、日本語だけに目を奪われていないでしょうか？ 外国にルーツのある子どもが直面する問題は、日本語だけでしょうか。日本語ができるようになれば、すべて解決するのでしょうか。

いいえ、日本語だけの問題ではありません！

例えば、
・学校の仕組みが違う。
・自分の国の当たり前が日本では受け入れられない、あるいは違いがあることに気付いてもらえない。
・自分のルーツや言葉、文化、母親などに誇りが持てない。
・英語以外の言語は認めてもらえない。
・そもそも自分が何人かわからない。
・自尊感情を失っている。
・本来持っている良さを生かすことができない。

これらはほとんど、日本語以前の問題です。これらの問題が、深刻な問題になるか、問題とならないか、または、容易に解決できるかは、出会った人たちの接し方、関わり方次第です。

そこで私たちは外国にルーツのある子どもが日本で力を伸ばせるように、次の2つの視点から対応を考えていきたいと思います。

1）「日本語の学習」、「日本語での学習」を保障し、適切な指導者があたること。

2） 日本人側の意識が変わり、グローバル・多様性の意味を理解すること。

外国ルーツの子どもに関わる人には、それぞれの子どもが育ってきた環境・言語などの背景や、その子のよいところ、好きなことなどをしっかり認識し、子ども達の力を引き出していく力が求められています。

そのためには「対話」が必要です。対話とは、単なる面接とは違い、きちんと相手に向き合って話をすること、つまり信頼関係の上に成り立つコミュニケーションです。きちんと対話をしていないと、その子の背景や本当のその子自身を知ることはできません。

子ども達にとっても、その保護者にとっても、一番必要なのはただ日本語を教える人ではなく、一人の人間として対等な関係で、つたない日本語にも耳を傾けてくれ、子どもや保護者が心を開ける人です。対話できる人こそが、日本で自分らしく生きるために大切な存在です。

日本にいる子ども達は、
みんな日本を支える子ども達。

★コラム 「対話、できていますか？」

多様な背景を持つ子ども達それぞれにあった指導をするためには、彼らの置かれている状況を正確に知ることが必要ですが、それは対話を通して得られるものです。

一方的な質問からは本当のことは聞き出せません。お互いに敬意を持ち合い、相手の考えに耳を傾ける対等な関係が作る信頼関係の上に対話が生まれ、相手のことを深く知ることができるのです。

子ども達の背景を知ることは、必ずしも簡単なことではありません。

A 君のお母さんはトルコ人です。だから A 君もトルコから来たと周りのみんなが思っていたけれど、実は、お母さんは子どものころスイスに渡っていて A 君はトルコに行ったことはなかったということが地域の活動の中でわかりました。来日後すでに1年以上たっていましたが、言葉の学習に必要な最低限度の情報がとれていなかったことになります。これは、対話ができていなかった例です。

日本の子どもでも、思いを100%伝えるのは難しいものです。外国ルーツの子であれば、なおゆっくりと話を聞いたり、ときにはイラストを使って対話をしたり、しっかり耳を傾ける意識がないと、理解が難しいのではないでしょうか。

第2章　おなじって嬉しい！ ちがうって楽しい！

お互いの文化を尊重するってどういうことでしょうか。違いを認めるってどういうことでしょうか。

多文化共生や異文化理解などの言葉はよく聞きますが、それらの言葉をただ知っているというだけでなく、実際に体験してみるとより深く理解できるのではないでしょうか。

私たちは、日本語指導や地域の日本語教室で出会った人たちとの活動から、違いを楽しむ力がまず必要だと気が付きました。「おんなじ！」って嬉しいのです。「ちがうね！」って楽しいのです。ゲームなどの体験を通して、多文化共生や異文化理解という言葉を実感してみましょう！

2－1．おんなじ！ ちがう！ を楽しむ力がつくゲーム

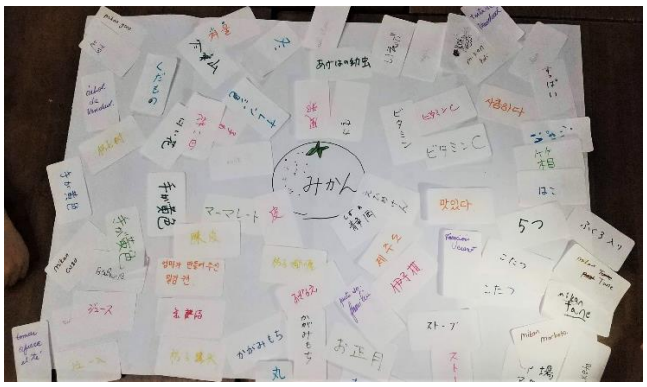
これを実感し、楽しむ力を付けるために、「イメージビンゴ」と名付けているゲームを紹介します。目の前にいる多文化の子ども達と学校で、地域で、まずは試してください。いろいろなことに気づくでしょう。

★やってみよう 「イメージビンゴ」

連想するものを出し合って、一人ずつのイメージに対し話がふくらむゲームです。
5～6人のグループで楽しむのに最適です。
時間をかけて対話を楽しむことが目的ですので、時間があればあるだけ楽しめます。
（所要時間20分～）

【用意するもの】
大きな紙、付箋5枚×人数分、サインペン

【やってみよう】
1．「〇〇と言えば？」を順に聞いていきます。（例「夏と言えば？」）
2．その中で出てきた言葉を一つ選んで、お題にします。
　（例「ひまわり」「すいか」「せみ」「海」等の中から「せみ」を選んだとします。）
3．大きな紙の真ん中にお題を書きます。（今回は「せみ」）
4．一人5枚ずつ付箋をくばり、その語（せみ）からイメージするものを各自5つ書きます。
　（「むしとりあみ」「なきごえ」「ぬけがら」等を1枚に1つずつ書いていきます。）
5．順番に書いたものを一つずつ発表し、大きな紙に貼っていきます。
6．同じものがあれば「ビンゴ」と言って、付箋を同じ場所に貼ります。
7．「どうして？」「なぜ？」というイメージが出てきたときは、理由を聞き、話を楽しみます。
　（「おいしい」「ビール」「おしっこ」なども出てきました。悲鳴も）



お題が「みかん」の場合

文化的な背景や、育ってきた環境などが反映されて興味深く、対話の糸口になります。同じイメージでも、その言葉に至った経緯も人によって違い、話してみないとわからないことがたくさんあることに気が付きます。

【一緒に楽しむために】

まだ文字が苦手だったり、言葉が出てこなかったりする場合は、絵でもいいです。早く紙が終わったら勝ち、残ったら負けというゲームではありません。ビンゴで人と合わせることが目的ではなく、対話し、違いも楽しむことが目的です。大人も子どもも、先生も生徒も関係なく、知らないことを教えてもらえます。

お題を決めるときは、大きなイメージから小さなものを選ぶのではなく、小さなイメージから大きく広がるお題の方が盛り上がります。お題を「果物」（大きいイメージ）にすると、「りんご」「バナナ」など果物の種類が出てきて、イメージビンゴとしてはおもしろくありません。

逆に、お題を「バナナ」（小さいイメージ）にすると、「病気」や「さる」、「すべる」「ケチャップ」「てんぷら」などイメージが広がり、「なんで？」「どうして？」と声があがり、面白くなります。

【子どもの反応】

自分が出したものと同じだと、「ビンゴ！」という声がたくさんあがり、嬉しい気持ちになります。

反対に誰も同じイメージの人がいなくても、みんなから「なんで？」と質問されて、自分が教えたり、興味を持ってもらったり、感心されたりして嬉しい気持ちになります。どちらにしても主役になった気分が得られます。周りの人も、自分が思いもしなかった答えが人から出てくると、知らなかったことを知ったり、違いを知ったりする機会になり楽しめます。是非、イメージビンゴを試してみてください！

2−2. 多様性と多文化共生

イメージビンゴのゲームを通して、何を感じましたか。

文化的な背景や、自分が育ってきた環境などが反映されて興味深く、対話の糸口になることが実感できたかと思います。

同じだと嬉しいですし、違うことは悪いことではなく、楽しいことだと感じますね。

日本人だから、みんな同じでしたか？ 年代や育った地域によって違いましたよね。

国ではなく、一人ずつ違いがあることに気が付いたと思います。「多様性」「多文化共生」「異文化理解」という言葉で学ぶのではなく、このような活動を通してみんなが実感することが大切ではないでしょうか。

おなじって嬉しい！
ちがうって楽しい！

こんな体験を子ども達にもたくさんしてもらうことによって、将来本当の意味でのグローバルな人材と成長するのではないでしょうか。地球っ子グループでは、日本語の学習だけではなく、多様性を楽しめる活動を日々行っています。HP や facebook などで活動の様子を是非ご覧ください。
http://chikyukkoclub2000.com/
https://ja-jp.facebook.com/CoconicoUrawa
https://tenkirin.jimdofree.com/

特に見ていただきたいのは、「みんなちがってみんないい」を感じた日、2019年11月23日の地球っ子クラブ2000のカレー作りの活動です。この日はママたちが先生になって、ベトナム、バングラデシュ、日本のカレーを作りました。ベトナムカレーはベトナム出身のお母さんに、バングラデシュのカレーはバングラデシュ出身のお母さんに教えてもらいました。

食べた後は、おやつもそこそこにハンカチ落としや、フルーツバスケットを楽しみました。長い時間一緒にいても、まだ遊び足りない様子でしたが、最後はみんなでママたちに「ありがとう」、そして「さようなら」の挨拶を日本語、中国語、ベトナム語、ベンガル語、タガログ語で言いました。この日すっかり仲良くなった D 君が急にタガログ語で「サムリンパキキータ！」と言ったら「え？」と驚く日本人の K 君。D 君が「僕、フィリピンで生まれたんだよ」と言うと、「あ、そうなんだ！」と納得した K 君。 この日はじめて会ったけれど、K 君にとっていつもと変わりなく夢中で遊んでいたから、気がつかなかったようです。

「〇〇人だから、仲良くしなさい！」や、「〇〇から来た子だから、遊んであげてね」ではなく、

自然に仲良くなった子がたまたま外国にルーツのある子だった。
ただそれだけのこと。

自分の言葉や文化も、友達の言葉や文化も大切にできるようになったらいいですね。
カレーをはじめ、多様性を感じた一日。「みんなちがって　みんないい」よく聞く言葉ではありますが、言葉ではなく、こういう活動から少しずつ大切なことが学べるといいなと感じます。

★コラム 「差別はいけません」

「差別はいけません」「ちがいを認め合いましょう」「偏見はダメです」「友だちになって仲良くしましょう」と、言葉で言っても分かったような気がするだけ。学校ではいろいろなカレーを作ることは無理かもしれませんが、クラスに外国ルーツの子どもがいるからこそ、日頃の生活場面で「ちがい」をよい意味で活かせる機会が散りばめられているのだと考えましょう。

「今度、転校してくる子は“さいたま出身”ですって。差別しちゃいけないよ」というセリフを聞いてどう思うでしょうか。子ども達のまわりをとりまく大人たちには、外国にルーツを持つ子ども達が良好な友達関係を築けるアシストをする役割があるのです。それに、日本の子どもも日本を一歩出たら、自分が外国人になるのです。子ども達が、自分が外国に行ったと想像するなど、視点を変える活動も必要です。

好きなことがちがう、食べ方がちがう、持っているイメージがちがう、得意なこと、不得意なことが違う、声が大きい子どももいれば、小さい子どももちろんいる、友達と遊ぶことが好きな子もいれば、一人でいるのが好きな子どももいる。

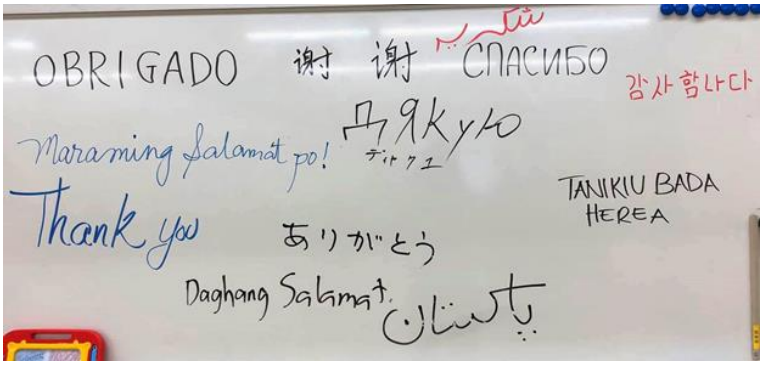
日本人だから・〇〇人だからではなく、男だから・女だからではなく、障害があるから・ないからではなく、

人はみんな一人ずつちがう。異文化の最小単位は個人。

多様性を楽しめる環境は、いじめの防止にもつながります。

多文化クイズ

「どこの国の文字かわかりますか？」



答えはあえて書きませんが、子どもや近くに住む外国の人に教えてもらってください。

知らないことがたくさんあって、一緒の地域に暮らす子ども達から学ぶこともたくさんあります。知らないともったいないですね。世界にはいろんな人がいて、いろんな文化と言葉を大切にして生きています。ここにない文字も、世界にはたくさんあります。それを、クラスにいる多文化の子ども達から教えてもらうことができます。それは日本人の子どもにとってもグローバルな学びとなります。

絵本紹介「多文化・多様性を感じられる絵本」

『おんなじおんなじでもちょっとちがう』

ジェニー・スー・コステキ=ショー（作）・宮坂宏美（訳）（2011）光村教育図書

アメリカのエリオットとインドのカイラシュはペンフレンド。絵に手紙を添えてお互いの ことを伝えます。二人とも木登りが大好きで、家族と住んでいて、バスに乗って友だちと学校へ……。二人のくらしはおんなじ？ ちょっとちがう？

『みえるとかみえないとか』

ヨシタケシンスケ（作）・ 伊藤亜紗（相談）（2018）アリス館

宇宙飛行士のぼくが降り立ったのは、なんと目が3つあるひとの星。普通にしているだけなのに、「後ろが見えないなんてかわいそう」とか「後ろが見えないのに歩けるなんてすごい」とか言われて、なんか変な感じ。ぼくはそこで、目の見えない人に話しかけてみる。目の見えない人が「見る」世界は、ぼくとは大きくちがっていた。

『ねえどっち？』

二宮由紀子（作）・ あべ弘士（絵）（2004）PHP 研究所

ある朝、人間の子どもがシマウマのしまこさんに尋ねました。「ねえ、きみって白いしま模様のある黒い馬？ 黒いしま模様のある白い馬？」

『むこう岸には』

マルタ・カラスコ（作）・ 宇野 和美（訳）（2009）ほるぷ出版

わたしの夢は、いつかこの川に橋をかけること…。

『落語絵本 8 いちがんこく』

川端誠（作・絵）（2004）クレヨンハウス

「一つ目小僧」に会って、驚いて逃げ出した、という話を聞き、どれ、ひとつ「一つ目小僧」を探しにいってみようとした男。「一つ目小僧」ならぬ、「一つ目小娘」を見かけて追いかけ、まよいこんだところが、だれもがみ～んな「一つ目の国」!!珍しい話につられた男、自分のほうが珍しがられるハメとなり・・・。

『落語絵本 9 そばせい』

川端誠（作・絵）（2005）クレヨンハウス

むらさきの羽織がトレードマークの清（せい）さん、もりそば 40 枚を食べる強者で、ひと呼んで「そば清」さん。はずみで賭けにのり、50 枚に挑戦することに。

そばの本場、信州で手にいれた秘薬をしのばせ、いざ、食らわん!?

（絵本の内容紹介は、絵本ナビ https://www.ehonnavi.net/より引用）

第3章
すべての子どもがいきいきと成長できる学校・地域を作るために

私たちの国は、日本人中心に日本文化を軸として、実質的に日本語を主として暮らしてきた国です。この国に、今、世界のさまざまな国々から人々が来て、一緒に暮らすようになりました。

それに伴い、学校や地域には、言語、文化など、多様な背景を持つ子ども達が多く存在するようになりました。外国にルーツを持つ子ども達は、当然のことながら、みんなと違うところがあります。学校にも社会にも、いろいろな決まりや習慣がありますが、それぞれ違います。

各自治体からは、いろんな文化や言葉を持った人たちと、隣人として共に豊かな国や地域を作っていこうという多文化共生推進プランが出されています。いい学校、いい地域、いい国を作るために、日本の学校も、教育も変わっていくことが求められています。

この章を通して、子ども達の背景や置かれている環境を知り、子ども達にあった対応の具体的方法を探っていきたいと思います。

3－1．外国ルーツの子どもの気持ち・親の気持ち

ある日突然、家族の都合で来日し、言葉もわからない、友達もいない国の学校に行く子どももいます。大人は少なからず日本語の準備をしてきますが、子ども、特に年齢の低い子どもは日本語がほぼゼロの状態で学校に行くことになります。少し年齢が進むと、家族の都合で来たことに抵抗感があったり、自分の状況を受け入れるのに時間がかかったりと複雑さは増してきます。けれども、そんな子ども達や、保護者の声はなかなか聞こえてきません。日本語で自分たちの困り感を外に伝えるすべはなく、たとえ伝えたとしても、それを受けとめて改善しようとする体制や環境が十分整っていないからです。

ここでは、私たちが受け取った彼らからのメッセージを軸に考えてみます。ここを出発点に、子ども達を取り巻くすべての人は、まず、子ども達や保護者の声を受け止められる人になってください。日々の関わりの中から子ども達や保護者の気持ちに思いが馳せられるよう、対話のスキルを磨いてください。

（1）子どもの気持ち

学校に入った子ども達は、わからないことだらけ。学校へ行く期待や楽しみがある一方、不安な気持ちでいっぱいです。とりあえず周囲から言われたことをやるしかありません。そして助けてほしい気持ちが伝わらないときは、自分で何とかしようと必死です。子どもの気持ちを受け止め、不安な気持ちに寄り添い、わくわくした気持ちを膨らませるようにするには、どうすればよいでしょうか。 私たちが子ども達から受け取ったメッセージを紹介します。

わくわく

ともだちできるかな。

先生やさしいかな。

ここがポイント

最初、子ども達はわくわくした気持ちいっぱいです。クラスで迎えるとき、クラスメートもわくわくした気持ちで迎えましょう。そして、そのあともわくわくした気持ちが続くかどうかは、まわりの対応次第です。

わかりません

何時に家へ帰れるの？

机の上に何を出すの？

忘れ物しちゃった。
どうしよう。

今着替えるの？

先生は何を言っているの？

ここがポイント

先生の指示や説明がわからず、できないことがたくさんあります。また、「わかりません。おしえてください」と言えません。そんな時、まずはクラスメートの行動を見てまねます。
座席は先生の近くにすることが多いようですが、一番前の席ではクラスメートの様子が見えなくてとても困ります。

みんなと一緒にできるのに

みんなは外でバッタを捕まえたり
ドングリを探したりして楽しそう。

授業の時、私だけ
ひらがなの練習…

私は別の部屋で日本語の勉強。
私もみんなと一緒に勉強したいな。

ここがポイント

体育や生活科、図工など、子どもが苦痛を感じずに楽しく学べる時間は、クラスになじむチャンス。
日本語の勉強をする場合は、時間割によって、クラスから「取り出し」にするのか、クラスに「入り込み」にするのか配慮が必要です。

忘れ物しちゃった

図工の材料をいつも忘れます。
キラキラモールやきれいなリボン、
わたしも使いたかった。

プールカードのハンコがなかったので見学。体温も計ったし、プールセットも持って行ったのに。

材料がないから作らなくてもいいと言われた。
〇〇君の作ったシュート棒、かっこいいな。

ここがポイント

自分だけない、自分だけできないのはとても辛いこと。
連絡帳で持ち物を伝えるときは、持ち物の名前や参考にする教科書のページを書かせるだけでなく、絵や写真を添えるなど、何を持ってくればいいか伝わる工夫をしましょう。

どんどん進んじゃう

漢字の勉強も、新しい漢字が急に増えて覚えられない。

最初は算数が好きだったのに、
どんどん難しくなってついていけない。

がんばってもわからないことが増えていく。

ここがポイント

日常会話力だけで言葉の力を測っていませんか？
「学習言語能力」については、生活の中で身に付くことはあまり期待できません。日本語指導担当教師が中心となった計画的な支援が必要になります。

がんばっているんだけど、なかなか点数がとれない…

日本に来たら、できない子になっちゃった。
国にいたときは勉強もよくできたのに。

ひらがな全部かけるようになったよ。でもテストでは０点だった。

「つくし」、「かっぱ」、「もみじ」って何？

ここがポイント
すぐに日本語で勉強できるわけではありません。子どもによっては自信をなくしてしまうこともあります。
できることをほめる！ できないことを数えず、できるようになったことを数えましょう。

★コラム 「評価は何のため？ 誰のため？」

小学2年生の時は、なんとしても掛け算を！ 3年生は割り算を！ と、その学年でマスターしなければならない重要な単元があります。できるに越したことはありませんが、子どもによっては、今その単元を学ぶのが難しいケースもあります。みんなより少し遅れても、半年後なら無理なく頭に入るかもしれません。スマホで音声入力が当たり前の時代、漢字の正確さより発音の正確さが必要な時代になるかもしれません。その子の人生を長い目で見て、その子にとって今、何が必要なのか、その単元はどうしても今でなければいけないことなのか。なにより、やる気や元気がなくなる評価になっていないか、点数は取れなくても、何かほめるポイントや、前より伸びたところはないか、先生や関わる大人が子どもを通して自分自身を評価してみるのはいかがでしょうか。

算数の問題で、「めだかが5ひきいました。ともだちに3びきあげました。いま、なんびきでしょう？」という問題。正解は「2ひき」。答えに「2びき」って書いても、〇はもらえませんでした。式も計算もあっています。「ひき・ぴき・びき」の違いです。さて、これは算数のテストと言えるのでしょうか。

がんばって、漢字をたくさん覚えました。読める字もたくさんあります。同じように書いたつもり。でも、「はね」「とめ」「はらい」、長さ、出てはダメ・・・。なかなか〇がもらえません。でも、今の時代、手書きで書くことも少なくなって、日本人の大人だって正確ではありませんよ。漢字は嫌いになったら、覚えることを諦めてしまいたくなります。だって2000字程あるんですから。

英語の授業でも、「Fish」＋「Spring」＝？ 「鰆」のカードを選んだら正解です。英語だけは、自信があったのに、漢字が読めないから選べなかった。もっと難しい文章でも全部理解できるのに。中学3年生程度になると、英語で日本の文化についてのストーリーを読んで答える問題もよく出てきます。英語がわかっても、漢字がわからない、文化がわからないので答えがわからないことがあります。これは、英語のテストと言えるのでしょうか。

評価というのは、とても難しいものです。算数や英語の評価のはずなのに、結局は日本語の評価になっていないか、評価をしたためにやる気をなくす結果になっていないのか、考える必要がありそうです。

メッセージ「親にも言えない」（アルゼンチン出身・5年生で来日）

私は、日本人の両親のもと、アルゼンチンで生まれました。アルゼンチンでは日本の学校へも通っていたし、成績も良く、クラスでいつも1位か2位でした。ずっとアルゼンチンに住むと思っていたし、その頃は科学者になりたいという夢もありました。ところが、ある日両親から突然「みんなで日本行くことになった。」と言われました。私の意見は通りません。スーツケース2個に必要な物をつめて、入らないものはすべて捨てるしかありませんでした。好きな本も、思い出のぬいぐるみも、友達の写真も、すべて捨てて日本へやってきました。

初めて日本の学校へ行った日のことは、今でもよく覚えています。緊張して教室へ入ったら、アルゼンチン人が来ると聞いていたクラスメートは、見た目が日本人の私にがっかりした様子でした。日本語が多少できたことから、誰も私を助けてくれはしませんでした。でも、日本の授業は全くわかりませんでした。5年生といえば、難しい言葉も多く、漢字もたくさんあり、授業で出てくる言葉はほとんど知らない状態でした。全く違うページの教科書を、ずっと開いている時間もありました。

家へ帰ると、お母さんが「学校どうだった？楽しかった？」と聞いてきました。全く授業がわからず、ただ座っているだけの学校が楽しいはずがありません。それでも子ども心に、アルゼンチンの家を売って家族で日本に来て、帰る場所がないことは理解していました。「楽しくない。アルゼンチンへ帰りたい」とは、たとえ親にも言えませんでした。「うん。楽しかった」と答えるしかありませんでした。そして、科学者という夢もここでは叶わない、あきらめるしかないと思いました。

それから、私は教科書に出てくるすべての漢字を調べ、覚え、勉強しました。本当に大変でしたが、私は夢を通訳に変更しました。自分のルーツを活かせると思ったからです。そして、その夢に向かって猛烈に勉強し、夢をかなえました。今ではアルゼンチンやメキシコ代表のスポーツ選手の通訳をし、充実した日々を過ごしています。

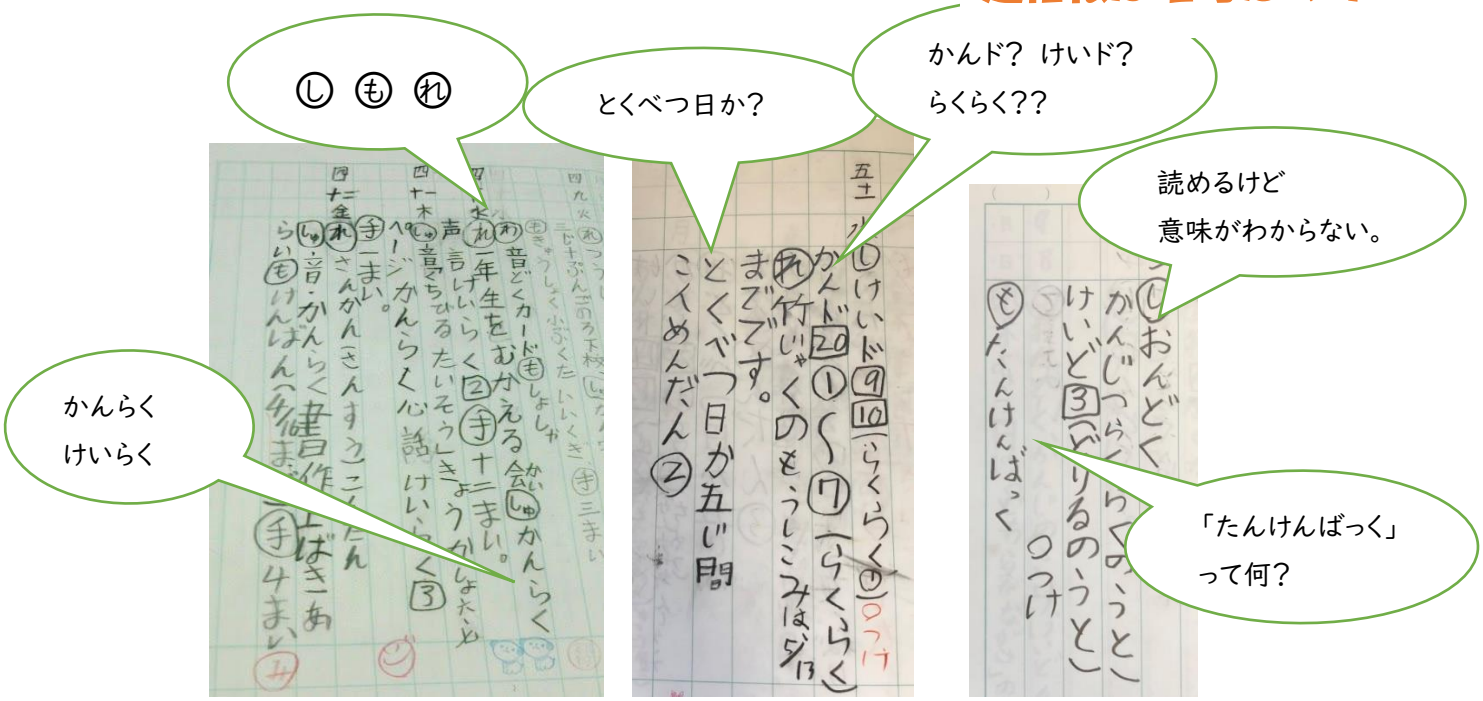
私の両親は日本人ですが私が生まれ育ったのはアルゼンチンです。私の体には、日本の血が流れ、アルゼンチンの心があります。「よく、なに人？」と聞かれますが、私は日本人でしょうか？アルゼンチン人でしょうか？パスポートや見た目とは関係なく、これからは単純に〇〇人とくくれない人が、私だけではなくますます増えて行くと思います。「私は私」でしかなく、「私は私」でありたいと思います。

(2) 親の気持ち

家族の健康、子どもの将来の幸せを願っているのは、すべての親に共通していることです。子どもが日本での学校生活を楽しく過ごしてほしいと思っているのは、日本人も外国出身の保護者でも変わりありません。

学校の習慣は、私たちが思っているよりも、国により違いは大きいものです。たとえ日本語がわかるようになっても、違う文化背景を持つ国の学校文化を理解するのは難しいのです。

連絡帳は暗号だらけ



ここがポイント

連絡帳の略字は知らない人にはまるで暗号です。「し」や「も」「て」、「かんらく」「けいらく」、「かんド」「けいド」「とくべつ日か」は何を意味するのか、最初に分かるように説明しなければいけません。「連絡帳に書いてあります!!」ではなく、伝わっているかどうかを確認する必要があります。

個人面談
日本人のおばあちゃんと行くと…

先生はおばあちゃんと話してる。
わたしはいなくてもいいみたい。

先生の言葉が難しくて、
全然わからない。

ここがポイント

子育ての主役はお母さん。敬語でおばあちゃんと話しても全くわかりません。おばあちゃんはサポーターですから、先生の正面にはおばあちゃんではなく、お母さんに座ってもらいましょう。お母さんの顔を見て、お母さんがわかりやすい言葉で、お母さん中心に話を進めてください。

ＰＴＡ活動に参加したいけど…

みんなと仲良くなりたい。

学校の様子も知りたい。

やると迷惑かな・・・。

ここがポイント

どうすれば、言葉の問題を超えて PTA 活動に参加できるでしょうか。みんなと同じようにじゃんけんで決めても、できることとできないことがあります。やっぱり広報などは難しいでしょう。運動会準備ならできそうかな？バザーの値付けは大丈夫かな？「私も手伝うから」と声をかけてくれる人がいて、少しのお手伝いがあれば、一緒にできることもたくさんあるはずです。そういう PTA 活動を通じて、仲良くなる人や理解してくれる人が増えると、そのお母さんにとっても、周りのお母さんにとっても、子ども達にとっても、学校や地域がお互いに居心地の良い、安心できる場所になっていくと思います。

持ち物のこと

林間学校の持ち物。
健康保険証のコピーは
なぜ必要なの？

図工に使うリボンやビーズ。
家にないときは買うの？

手提げバッグを用意して持たせたけど、
「形が違う！」と言われました。

遠足のしおり？
エチケット袋？
何かわからない

どこで買えるの？

ここがポイント

「絶対、必要な物」は、「あれば持ってくる物」と区別して伝えましょう。例えば、修学旅行の際の持ち物の欄に、必ず必要な物には☆マークをつけたり、イラストを入れたり、機会を見つけて実物を見せたりすると効果的です。

また、提出しなければいけない書類（食物アレルギー等連絡表、緊急連絡先、健康状況調査票など）については一緒に記入するなどのサポートが必要です。ここでもつながりが必要ですね。

毎日のお手紙。どれが大切？

学校からの手紙、
毎日たくさんあるなぁ。

難しい言葉がいっぱい

ルビを振ってくれるけど
意味は分からない

台風等に伴う臨時休校の措置について

新緑の候、保護者の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。
また、平素は本校教育にご理解、ご協力をいただきありがとうございます。
さて、報道によりますと、台風6号が接近しており、進路に関東地方に接近する可能性もあります。午前7時の時点で、○○市に「特別警報」または、「暴風警報」が発令されている場合や、午前7時の時点で、公共交通機関が運休している場合は、今回の台風に限らず、年間を通して、臨時休校となります。このような基準となっておりますので、ご承知おきください。

学校が休みがっこうやす

7:00

■暴風に関する警報以外（例 大雨洪水警報 強風注意報など）では臨時休校にはなりません。
特別警報はすべて臨時休校となります。
■授業中に「暴風警報」または「特別警報」が発令された場合は、児童の安全のため、天候の様子を見ながら、下校時刻を判断します。台風の接近など、荒天が予想される日で、保護者の連絡先が、通常と異なる場合は、必ず連絡帳でお知らせください。
■緊急時以外の電話での問い合わせは、ご遠慮ください。
■暴風警報・特別警報が発令された場合、なかよし活動も休止されます。

わからない言葉も
絵があるとわかりやすい！

線や色のあるところだけは
読まなきゃ！

手紙の上に☆マークがある！
これは大切な手紙ね！

ここがポイント

わからない手紙の内容をについて聞く人さえいれば解決できることも多いです。外国出身保護者が相談できる人につなげるのが一番の方法です。クラスのお母さんたちにつながるように配慮できるといいですね。お母さん同士は、単なるお世話係ではなく、同じ年齢の子を持つ仲間としての関係を作る必要があります。また、地域の日本語教室などのボランティア団体につなげるのもいいですね。

宿題は、親も大変！

音読カード、九九カード。
書き方がわかりません。

宿題のマル付けが
難しいです。

ここがポイント

読めない漢字の間違いをチェックできるのでしょうか。日本語で書かれた算数の問題のマルつけができたとしても、間違えたところを日本語を使って教えることができるでしょうか。家でマル付けをするのは、外国出身の保護者にとっては難しいことが多いということを理解しましょう。

メッセージ 「これで良かったのか？答えの出ない親の思い」（中国の母親の話から）

中国の男性と結婚した中国の女性 G さん。二人は若いころに長く日本で住んでいたこともあり、日本語での会話や読解力に問題はない。中国で出産し、子育てをし、5才のときにまた家族で日本へ来て、日本での生活を始める。そのときには、5さいの M ちゃんは日本語が全くわからない状態だった。少しでも日本語がわかるようにと幼稚園に入った。

ある日、M ちゃんが幼稚園から帰ってきて「友達ができたよ」といい、とても喜んだ。「だれ？どんなこ？」と中国語で聞くと、「言葉を話さない子がいるの。いつも、お部屋の隅で黙って一人でいるの。私と同じだよ。何も言えないんだよ。だからお友達なんだ。」と、丁寧に中国語で話してくれた。返事ができず、涙が出てきた。中国語ではこんなに上手に話ができるのに･･･。

ある日、こんなこともあった。ステーキをフォークとナイフで切っていたら、「ママ、とっても優雅だね」と。こんな小さい子が意味がわかるの？と思い「優雅っていう意味しってるの？」と聞くと、「うん。心からの美しさだよ」と答えた。この子はなんて豊かな言葉を話す子だと我が子ながら感心した。中国語なら、豊かな言葉を話すのに、日本に来たら友達と話もできないなんて、本当に連れてきて良かったのか。中国に帰るべきじゃないのか。と何度も考えたが答えはすぐに出るものではなかった。

小学校に入るときは、日本語を多少理解できるようにはなっていたものの、心配はつきない。特別支援学級も考えた。言葉の通り「スペシャルサポートクラス」だと思い、特別に良い対応をしてくれるクラスだと思ったからだ。日本語指導員をつけてもらうことも考えた。M ちゃんをよく知る地域の活動をしている K さんに相談したら、「1年生だから、みんなと同じクラスで勉強した方がいい。M ちゃんは、優秀だしプライドも高い。一人取り出されるより、みんなと同じで様子を見た方がよい。」との判断だった。それは、大正解だった。2年生になった今では、勉強もよくでき、「まじ？やばくね？」といった若者らしい日本語も柔軟に使いこなしている。

心配はつきないもので、今度は「中国語を忘れたらどうしよう」となるのが親のさが。日本語は豊かになってきているので、家庭でも豊かな中国語で話すように心がけている。

3−2. 関わるすべての人が共有すべき知識・態度

数年たつと子どもの方が日本語が上手になります。そして母語を忘れたり話せなかったりします。母語・母文化に対する周りの反応から、子どもは親が日本語ができないことや、親の出身国に対して「恥ずかしい」という気持ちを持つことも少なくありません。親を尊敬する気持ちや、自分にルーツがある国を認めるということは、アイデンティティ形成にも関わってくることです。

（1）家庭内言語

「家でも日本語で話してください」と言っていませんか？

お母さんの心が一番伝わる言葉、それは自分の母語です。子どもが育っていく中で、「ごはんできたよ」「早く起きて」「宿題終わったの？」などの生活の会話だけではく、気持ちや感情、季節や世界など目に見えないものについて、親子の間で豊かな会話があることが大切です。豊かな会話から思考や感情が育つのです。自分の母語でなら、豊かな表現ができるはずです。子どもが成長して深い会話が必要になった時、子どもは日本語でしかできず、親は母語でしかできなくて、親子のコミュニケーションが成り立たなくなるということも、よく起こります。母語を使うか、日本語を使うかは各家庭の判断によりますが、何より大切なことは、家族の会話があることです。周りの日本人が「家でも日本語で話してください」と簡単に言わないようにしましょう。日本生まれの外国ルーツの子どもについても同じです。

家庭で豊かな会話をたくさんし、軸になる言葉がしっかり育てば、もう一つの言語・日本語も育ちます！

（2）生活言語と学習言語

子どもはすぐに日本語がペラペラになると思っていませんか？

それは生活言語の話です！ 学習言語の習得には7～8年ほどかかると言われています！

日本の学校に来た子どもは、適切なクラス環境であれば、比較的早い段階で友達と遊ぶこともできて問題なく学校生活が送れているように見えます。でも、ここで「日本語は大丈夫！」と思わないでほしいのです。

休み時間にクラスメートがボールをもって外を指さし、「＊＊＊＊！」と言ったとします。何を言ったかわからなくても、想像ができますね？きっと「一緒に遊ぼう！」「外へ行こう！」「おまえも来いよ！」こんなところでしょう。少なくとも友達が誘っているということさえわかれば、聞き間違えても問題ありません。授業中や給食の時も友達のすることをまねながら会話のやり取りもできるようになります。このように、言葉に頼らなくても時間や表情、声の大きさ、そのときの状況にたくさんの情報があり、比較的習得しやすいのが生活言語です。

ところが、学習言語は、言葉に頼る部分がほとんどです。抽象的な表現も多く、日常の会話では使わないような言葉もたくさん出てきます。「法律ができました」は理解できても、「法律が制定されました」と言われるとわからないのです。「同じ形」はわかりますが、「合同な図形」というとわからないのです。「（磁石が）はなれる」はわかりますが、「しりぞけ合う」は難しいのです。ですから、習得に時間がかかるのです。

一見、何の不自由もなく日本語で話しているように見える子でも、勉強の日本語が追い付いていないことがあります。決して、能力が低いわけでも、怠けているわけでもないということを理解してください。

日本語指導の対象でなくなってからも子ども達が学習言語を身につけて、本来持っている力を発揮するために、さらなる配慮や適切なサポートが重要です。

（3）英語じゃないんです

「日本語がわからない外国の子だから、英語で話さなきゃ」と思っていませんか？

日本語でいいんです！ 日本語がいいんです！

フィリピン出身の小学2年生の子がクラスに来ました。彼の母語はタガログ語ですが、英語もできます。日本人の英語より上手だとはいえ、2年生の英語です。学校では、みんなが英語で話してきます。日本の子も先生も、英語の勉強にもなるし、日本語よりも通じるから良いと思っています。

さて、このフィリピン出身の子は、この先どうなるのでしょうか？ 数週間日本に遊びに来ているなら、この対応でも良いでしょう。しかし、日本語が上達する機会がありません。さらに、日本人の2年生の英語では、英語が上達するわけでもありません。日本語でも英語でも、どちらでも満足な思考ができない状態になることは容易に想像できます。簡単な英語で話すなら、簡単な日本語で話してください。

目先の「便利」だけでなく、日本で育っていく子どもの将来を長い目で考えてください。

（4） 保護者とのコミュニケーション

個人面談や家庭訪問などで「子どもが通訳してくれるから大丈夫」とあてにしていませんか？

子どもを通訳にしてはいけません！ 子どもが通訳として入ったら、本当のことを正しく伝えられるでしょうか。
子どもは自分にとって都合の悪いことを親に伝えるとは考えられません。また、子どもが病院や役所などでも通訳のために学校を休んで、学びの機会をなくしてしまうのも問題です。

持ち物や日常の連絡などは、イラストやジェスチャーなども交えたやさしい日本語で保護者とコミュニケーションできるよう、日本人も訓練しましょう。Google 翻訳や、ポケトークの利用は注意が必要です（第 6 章「やさしい日本語・やさしい学校」へ）。日本語を駆使せずに、すぐに翻訳機に頼るような癖をつけてはいけません。

（5）日本語で見ないで。

日本語のレベルでその人のことを見ていませんか？

日本語のレベルと本人の能力は同じではありません！

突然、日本語しか通じない国に来たのだから、日本語ができないのは当たり前です。だからといって、その子の能力が無くなってしまったわけではありません。日本語でできないだけです。関わる人の理解あるまなざしが、何年かかけて子どもが本来の力と自信を取り戻すまでの大切な支えになります。

メッセージ　「失礼でしょ！」7 年後の怒り（フィリピン出身・中学 1 年で来日）

地元の中学に入ったけれど、1 年間は日本語指導なし。社会の先生が、空き時間がある時に漢字を教えてくれた。でも、全然覚えられなかった。クラスでは、授業中、小学3年生の計算ドリルを渡された。日本語がわからないだけなのに、こんな計算しかできないと思われていると思って、すごく悲しかった。でも、その時は言えなかった。

1 年後、日本語指導員がついた。不登校寸前だった。日本語指導員と英語の先生の応援があって、英語のスピーチ大会にでて、ブロックで優勝。そのころから元気が出てきた。1 年間の日本語指導のあと、特別に延長してもらって高校進学ができた。その後、短大進学。自分に自信がついてやっと言えた。「だって、失礼でしょ！」その後、結婚。現在、楽しく子育て中。

（6）「できない」ばかり見るのではなく、「できる」ことに目を向けよう

子どもの「できない」ことばかりに目がいっていませんか？

言葉も文化も違う学校に来たのですから、できなくて当然です。急にできない子になったと感じ、自尊感情を失う子どももいます。できない、できないと言われることに子ども達は敏感です。本来の力を出して自信を取り戻すまで、周りの人たちの「できるようになったことに目を向ける」姿勢が大切です。

★やってみよう 「～できない」を「～できる」に変えてみましょう！

目の前の子どもの「できない」ことは何でしょう。ひとつ例を挙げて考えてみます。

1．「授業中、座って話が聞けない」。 →これを「できる」の形にして右側に書きましょう。

2．そのためには、どうすればいいか条件を左側に書きましょう。

「先生がわかるように話してくれれば」、「授業が面白ければ」など出てくるでしょう。

目の前の子どものことを考えて、実際にやってみましょう！

2.「できる」ようになる条件を入れましょう。	1.「できる」の形にして書きましょう。
例）先生がわかるように話してくれれば	例）、授業中、座って話が聞ける。
・	、
・	、
・	、
・	、
・	、
・	、
・	、
・	、
・	、
・	、
・	、
・	、
・	、
・	、

どのような文章が出てきましたか。

・次の授業の準備ができない。→・次の授業の準備ができる。

・宿題をやってこない。→・宿題をやってこられる。

・ルールを守らない。→・ルールが守れる。

そのままできるものもありますが、条件をつければ「できる」ようになるものがたくさんあります。

・時間割を丁寧に教えてくれたら、次の授業の準備ができる。

・家で自分でできる宿題を出してくれたら、宿題をやってこられる。

・ルールをきちんと教えてくれたら、ルールが守れる。

この「～たら」の条件の部分を見てみましょう。外国ルーツの子どもの努力ではなく、周りの助けでずいぶんできるようになることがおわかりいただけると思います。

「あれもできない」「これもできない」というだけでは、何の解決にもなりません。どうすれば、どんな条件があれば、「できる」ようになるかを考えてあげてください。

「まだ、カタカナが書けない」ではなく、「ひらがなは書けるようになった」

「まだ、漢字が20個しか読めない」ではなく、「漢字が20個も読めるようになった」

時には、「今はできないけど、3年後には」や「母語でなら」という条件が付く場合もあります。それでも「できない」ではなく「できる」を見てあげてください。

(7)「ほめる種」をまこう

褒めるときに、「すごい！ すごい！」と言っていませんか？

褒めるということは、何でも「すごいねー」ということではありません。また、できたとしても、それがその子の持つ能力以下のことであれば、それを褒めるのも違います。間違っていても、とにかくがんばったから花丸をつけるというのも違います。

子どもは褒めると伸びるとはよく言われます。が、適切なタイミングで褒めるためには、褒める準備も必要です。能力より少しだけ上のこと、自分でも「できた！」と感じることができること、少しだけ頑張ろうと思えるようなものを与えましょう。「ほめる種」をまいておかなければ、芽はでません。

「ほめる種」はあちこちにまいて、いろんな場面で褒める準備をしておきましょう。まいた種がすぐに芽が出ることもあるし、すぐに芽が出ないこともあります。子どもに関わる人は、その種をまくことが仕事です。すぐに結果を出そうとせずに、少したってから、大人になってから花が咲くこともありますから、みんなで大切に育てましょう！

できないことを数えないで！
できるようになったことを数えよう！

第4章　今日からいっしょに！

外国ルーツの子どもの気持ちなどを理解した上で、具体的にどのようなクラス作り・クラス活動ができるでしょうか。子ども達との日ごろの活動の中から生まれたヒントを紹介します。

4－1．多様性を活かしたクラス作りのヒント

日本の学校に来た子どもが一日も早く学校生活に慣れるように、そして、日本人児童生徒にとって多様性を学ぶいいチャンスになるように、クラス作りのアイデアを紹介します。

大切なのは、「全員が互いに尊重し合うこと」、「子ども達がわくわくできること」、そして「外国ルーツの子どもも活躍できること」が挙げられます。お客さん扱いをするのは配慮ではありません。同様に、お世話のしすぎ、子ども扱いにも気をつけましょう。担任の先生の態度は、子ども達の態度に強く影響を与えます。

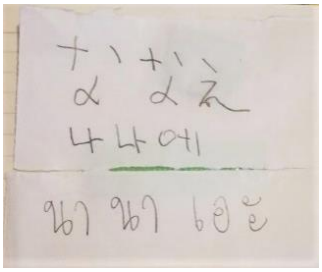
（1）その子の言葉でごあいさつ

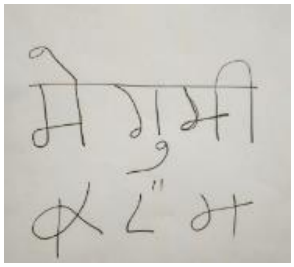
「こんにちは！」「ありがとう！」その子がクラスに来る前に少しでも言葉を覚えて迎えたいですね。「まってたよ！」「ともだちになろう！」というメッセージになります。

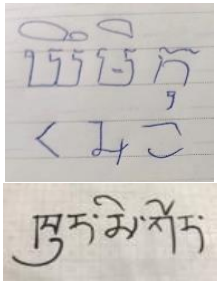
「『いただきます』はなんて言う？ なにも言わない？」「〇〇は〇〇語でなんていうの？」教えてもらいましょう。
日本語を教えるだけでなく、その子の国の言葉を教えてもらいましょう。それは日本の子どもにとって、多文化に触れるよい機会になります。お互いに学び合う対等な関係が良好な友達関係を築き、日本語の習得だけではなく、より良い学校生活を送ることにもつながります。

クラス全体が楽しいと感じるようになれば、互いに興味を持ち、子ども達同士で休み時間にやり取りするようになるでしょう。

その子の文字で名前を書いてもらいましょう！ 書き方を教えてもらってもいいですね。
いつも見慣れた自分の名前を、見たことのない文字で見るのは、新鮮で楽しい体験になりますです。







先生も楽しむことがポイントです。

地球っ子クラブ 2000 では、参加している人たちの母語で帰りの挨拶をします。学校でも、英語ではなく、クラスにいる子の言葉を使うことが肝心です。日本語、中国語、ベンガル語、ベトナム語、ウルドゥー語…みんなの言葉で挨拶できるのはとっても楽しいです！ ただし、子どもの中には、すでに母語でなんと言うかわからない子や言いたくない子もいます。そのような場合は子どもの様子を見て、無理をさせないようにしてください。

（2）子どもの国の大きい地図

「家はどこ？」「学校はどこ？」「大きい町は？」「なんて書いてある？」など。地図を囲むと、びっくりするほど子ども達同士で話が広がります。

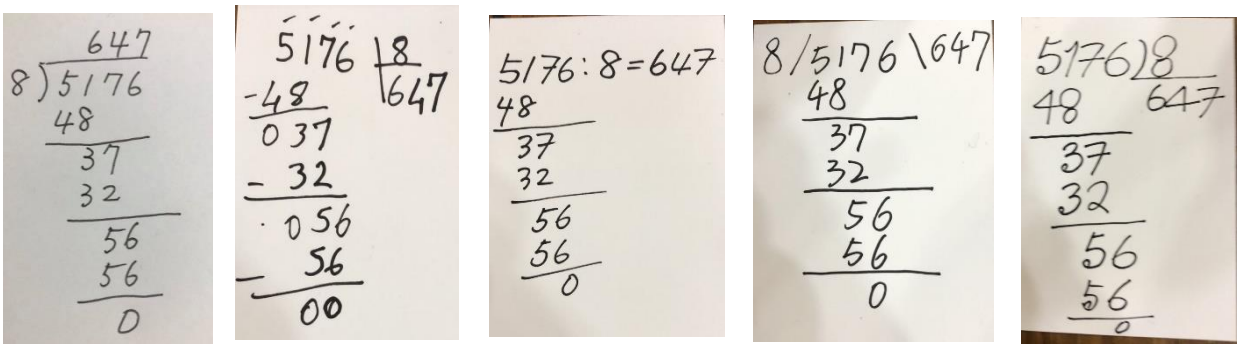
それぞれの国の言語で書かれた物を用意するのが望ましいです。その子の国の文字で書いてあると、効果抜群。現地で使っている地図は、保護者や知り合いなどにお願いしてみましょう。現地で購入するのが難しければ、インターネットからダウンロードしてもらう方法もあります。

（3）その子の国の教科書

その子が国で使っていた教科書があったらもってきてもらうといいです。何の教科書か？問題が解けるのか？簡単な問題でも、全くできないことに気が付くでしょう。割り算のひっ算はどう書くの？教えてもらうといいですね。

多文化クイズ

「どこの国の筆算かわかりますか？」



計算の仕方にも多様性がありますね！

記号は世界共通というわけではありません。式の書き方にも多様性があります。よく見ると数字の書き方も少し違いますね。

3･4＝12　「･」が意味するのは？

12：3=4 または 12／3=4　「：」「／」が意味するのは何かわかりますか。

国によって計算の仕方にも違いがあっておもしろいですね！

いつもはできる計算でも、やり方が違ったらいつもより時間がかかったり、難しく感じることにも気が付きます。

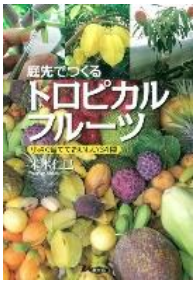
（4）絵本、図鑑から広がる話題

読み聞かせ用ではありません。本をいっしょにめくっていると、双方に聞きたいこと、言いたいことが出てきます。

絵本を読むときに、「マンゴーは何個？ 数えてみよう。いち、に、さん」「この服は何色？青、あお、青です。」など、数の勉強や日本語のテストをしてはいけません。

絵本や図鑑には話をしたくなる気持ちを引き出す力があります。子どもが主役になれるような使い方をしましょう。

絵本紹介 「子どもが話したくなる絵本・本」



『庭先で作るトロピカルフルーツ』

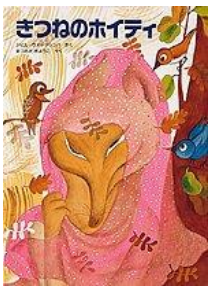
米本仁巳（著）（2014）農山漁村文化協会

日本では見られない果物も、暖かい国から来た子なら自分の家の庭にあったかもしれません。

『ぼくのママが生まれた島セブ』

なとり ちづ・おおとも やすお（作）おおともやすお（絵）（2010）福音館書店

フィリピンのセブ島での習慣や生活、教会、クリスマスの様子がきれいな絵で描かれていて、子ども達の話を引き出します。マーケットの場面は、子ども達が大好きです。



『きつねのホイティ』

シビル・ウェッタシンハ（作・絵）、 松岡 享子（訳）（1994）福音館書店

スリランカの暮らしがたくさん出てきます。きれいな色の服や家の調度品、食べ物などの一つひとつについて、スリランカのことを子ども達に聞いてみましょう。

『ぼくのうちはゲル』

バーサンスレン・ボロルマー（作・絵）、 長野 ヒデ子（訳）（2006）石風社

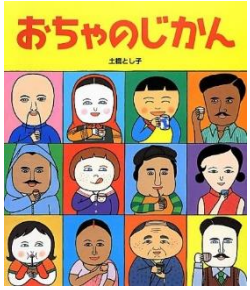
モンゴルの遊牧民の暮らしがよくわかります。都会で育った子でも、雄大な自然や移動式の家、動物やお正月など伝統的なことについてよく知っています。

『おおきなかぶ』

A・トルストイ（作） 佐藤 忠良（絵））内田 莉莎子（訳）（1966）福音館書店

ウクライナの昔話です。ロシア語で聞くととてもリズムがいいです。

「うんとこしょ、どっこいしょ」を、他の言葉でも一緒に言って楽しみましょう。



『おちゃのじかん』

土橋とし子（2013）佼成出版社

マテ茶やミントティーなど、珍しいお茶の作法や道具なども詳しく紹介しています。アルゼンチン、モロッコ、ロシア、イギリス、台湾などのお茶の文化が楽しく紹介されています。

★コラム 「国際理解・異文化理解教育の危うさ」

外国の話を聞くと、たくさんの文化の違いなどが出てきます。そこで、気をつけなければいけないことは、「〇〇の国は～」とか、「△△の国は～」といった固定観念を作り出さないこと。広く多様性を理解しなければいけない機会が、逆にステレオタイプを作ることになりかねないのです。そんなことが起きないようにするには、学習を指導する人の責任は重いと言えます。

いろいろな国の人たちと話していると、自分の考えが無意識のうちに、ステレオタイプになっていることに気が付きます。これは自分のステレオタイプを大いに反省した事例です。

その1「日本人的発想」

インドネシア出身の M さんといろいろ話していて、「インドネシアでは？」と質問すると、答えの前に必ず「私の家では・・・」「私の場合は・・・」と、枕詞のように入るのです。そのたびに「あ、またやっちゃった～」と思うのです。多様な人が集まっている国で育った人には、自然に「家によって違う」「人によって違う」という感覚が身についているのだと思いました。

その2「ほかの人のことはいい」

ある時、ロシア出身の T さんと話していた時のこと。「もっと頑張ろうと思っているんだけれど、外国人だから思うようにできないことがたくさんある」と。そんなに頑張らなくてもと思って「みんな同じだよ。みんなできてないことがたくさんあるよ。」というと、「すぐにみんなみんなって言う。他の人のことはいい。私が幸せになろうと思って日本に来たんだから、私はがんばれるだけがんばる。」

「そうだよな～」私たちはすぐに、「みんな」「みんな」といって安心していることに気が付きました。

その3「国と私はいっしょじゃない！」

小 I で来日した A さん。中学生になった時にあるイベントでの発言。

「みんなにお願いしたいことは（出身）国と私をいっしょにしないでほしいということです。私は国とおんなじじゃない。私を見てほしい」

テレビの報道などから、偏ったイメージで見られることが多く、彼女は日頃から、ステレオタイプのまなざしにさらされてツラい思いをしていたんだと思います。中学生の A さんに、教えられました。

4−2.　自分の言葉で主役になれる ～子ども達の言語にスポットを当てた活動～

ここでは、私たちが多文化の子ども達や保護者と活動する中で作り出した多言語の言葉遊びを紹介します。この活動を通して、お互いにたくさんの気づきがありました。自分の言葉を使った活動の中で、生き生きした笑顔と元気な声を聞いた時、きっと、「人にとって言葉とは何か」「言葉って楽しい」を感じることでしょう。

【多言語あそびの目的】

楽しみながら、外国ルーツの子を主役にします。彼らは日本語で勉強しているクラスではなかなか自分らしさを出せません。ゲームを通じ、自分らしさが出て、自信がつき、みんなに認められ、自分のルーツの国のことを話すきっかけになります。

日本の子ども達も、英語以外の外国語にふれて多文化・多言語に気づくいい経験ができます。日本語だと簡単なことでも、初めて聞く言葉でやると大変さを実感できます。それにより日本語で勉強している友達の気持ちを理解することにもつながります。

★やってみよう 「フルーツバスケット」

よくレクリエーションで行われるフルーツバスケットも、子ども達の言語にスポットを当てて行うことができます。

【用意するもの】

人数より一つ少ない座布団か椅子

【やってみよう】

1. 円になって、各自、座布団や椅子に座り、鬼が真ん中に立ちます。
2. 例えば、「桃」「りんご」「みかん」と一人ずつ割り振っていき、「桃！」と鬼が言ったら、桃の人が席を変わります。「りんご！」と言われたらりんごの人が席を変わります。「桃とりんごとみかん！」と言われれば、全員が変わります。鬼は席が空いたらすぐに着席します。一人座れない人が出てくるので、次はその人が鬼になります。

まずは全員が理解するために日本語で行います。そのあとで、その場にいる子の言葉で「桃」と「りんご」「みかん」を教えてもらい、同じルールで遊びます。

「桃」「りんご」「みかん」たった 3 つの言葉だけでも、自分の言葉ではないとすぐに反応できなかったり、間違えてしまったりします。言葉がわからないってどんな感じなのか少しですが体感できますし、外国ルーツの子どもが「その発音、ちがうよ」などと主役になって教えてくれ、いつもと違った楽しさがあります。もちろんフルーツの名前ではなく、もっとシンプルに「赤と青」「1と2」にするなど、その日のテーマで言葉を決めても楽しいです。

★やってみよう 「とんとんリズムあそび」

ただリズムに合わせて数字を言うだけでも、とても難しくゆっくりとしかできません。外国ルーツの子が活躍できるだけでなく、日本の子ども達にとっても、気づきが多いゲームです。

【用意】

4～10人のグループで丸くなって座ります。

研修会にて

【やってみよう】

1、時計回りに1、2、3…と番号を決めます。

2、手を2回「とんとん」とたたき、

自分の番号と違う人の番号を言います。

「とんとん（手をたたく）、1－6」次は6の人が言います。

「とんとん（手をたたく）、6－2」

「とんとん2－4」「とんとん4－1」「とんとん1－4」と続きます。

3、リズムに乗って言わなければなりません。間違えたらその人からもう一度始めます。

このゲームも、まずは全員がルールを理解するために日本語で行います。次に外国ルーツの子に、母語での数字の言い方を教えてもらい、その言語でやってみます。

【発展】

・番号を時計回りでなく、数字が書かれたカードで決めます。

番号が変わったり、順番通りではないことはより難しくなりますが、より楽しめます。

・数字だけでなく、好きなくだものや色、スポーツなどでもできます。

「とんとん、いちごーすいか」「とんとん、すいかーバナナ」など

「とんとん、バスケーサッカー」「とんとん、サッカーー水泳」など

・名札をつくり、名前でゲームをすることもできます。

名前のときは、自分には「さん」をつけず、人には「さん」をつけることにします。

【研修会で行った時の日本人の感想】

「グローバルスタディの時間にもできそう！」

「知らない言葉って難しいな。」「すごく緊張。『もう一回！』はつらかった。でもすごく楽しかった。」

「母語にない発音で勉強して混乱。」「新しい言葉を学ぶってこういうことだな～。」

「グループ学習の良さ感じた。」「まだ日本語が上手じゃなくても、みんなで楽しめる。」

「外国の子どもは、いつもお世話の対象になりがちだけど、子どもの母語を使って、認められる場面が作れそう！」

4−3．クラスでの学習に参加できることを目指して

教科書の中には、言葉や学習の元になる題材がいっぱいあります。来日間もない子どもでも、教科書の学習内容を体験や活動を通して楽しく体得することができます。子どもの頭の中の動きや興味に合わせて進めることがコツです。教科書に沿ってやるのではありません。活動を通して得た経験が、教室で「わかる！」「みんなと一緒に勉強できる！」と感じられる準備になるはずです。日本語の読み書きができていなくても少しでも授業に参加できるようにしなければいけないのです。少なくとも、何をやっているのかわからないまま45分座っているということだけはないようにしておきたいものです。

★音楽

「かくれんぼ」（小 2）

外国出身親子の勉強部屋に音楽の教科書を持ってきました。

「かくれんぼするもの、よっといでー」

大きな声で歌ってくれるのですが…。かくれんぼを知らないとのことでした。そこで、みんなでかくれんぼをしました。歌詞にある「もういいかい」「まあだだよ」「もういいよ～」と言いながら、私たちスタッフも何十年ぶりかのかくれんぼを楽しみました。

日本人の子どもなら必ず経験している遊びですが、外国ルーツの子どもは経験していないことが多いのです。遊びの体験により、テキストで学ぶものではなく、生きている言葉を獲得できるのではないかと思います。個別の日本語指導や日本語学習の場では、ドリルやプリントでの勉強より、このような経験ができる時間を作ることが大切です。

★算数

「重さ比べ（小 3）」「単位（小 2～）」

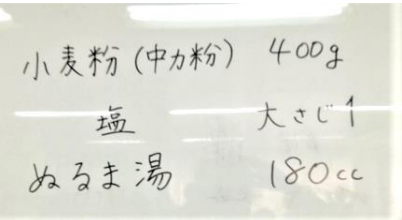
単位は、日常の生活体験に非常に関係が深い概念です。家の中でなかなかそのような体験が得られないと、いろいろな単位があることや、「はかる」ということが身近ではありません。

ただ目盛りを読む練習を繰り返す単調な作業では、子ども達はすぐに飽きてしまいます。子ども達の「はかりたい！」気持ちをうまく活用して、自主的にはかることにつなげられるといいですね。やらされるのではなく、自分でやりたくなる工夫が子どもの学びに繋がります。

「うどん作り・ホットケーキ作り」

お料理では、グラム、ミリリットル、CC、大さじ・小さじ、重い、軽い、多い、少ない、足りない、ちょうどいい、いろんな言葉が出てきます。なんでもかんでも大人がやってしまうのではなく、ちょっと考えてもらいましょう。

最初に材料を提示し、それぞれどれくらいの分量が必要か書きます。



「グラムは何を使ってはかればいいのかな。」「CC って何？」

いろいろなやり取りをすることで、子どもの頭の中は活性化され、こんな材料の時は「はかり」、こんな材料の時は「計量カップ」と、自ら考えるようになります。

はかりに興味を持ったら、その時が目盛りの読み方を覚える最高のチャンスです。はかりを子ども達の身近なところに置いておくと楽しそうにずっと計っています。「いつまでやってんの！」「はい、もう終わり～」と言わずに、子ども達の「はかりたい」という気持ちが満足するまで見守りましょう。

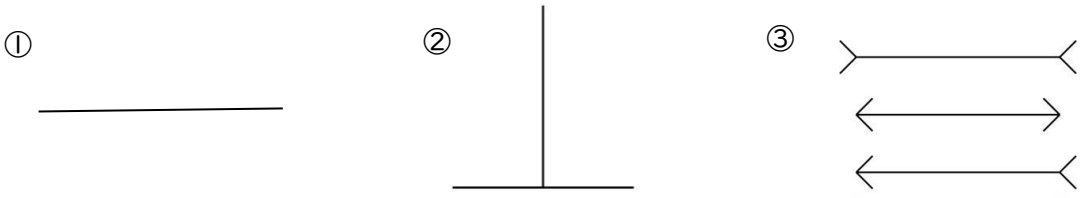
ホットケーキを作った時には、こちらが予期せぬこともおこりました。ホットケーキを食べようという段階になって、子ども達ができあがったホットケーキを一つずつはかりだしたのです。

少しでも大きい（重い）ホットケーキを食べるために、できあがったホットケーキをはかり、できるものなら一番大きいホットケーキを食べたい！ というわかりやすいモチベーション。こんなタイミングをチャンスとしてとらえられるような、関わる大人の余裕や観察眼を大切にしたいものです。

「センチメートル」

下の図の①と②と③、どれを測りたくなりますか？

単純に定規で測ってセンチメートルの勉強をするのではなく、測る理由があること、測りたくなることが大切です。②や③は、定規で測っても信じられず、何度も測るでしょう。（すでに知っている子もいるので、あえて長さを変えたものも用意しておくと良いでしょう。）



★国語

国語の宿題として、音読があります。来日間もない日本語を母語としない子どもにも、音読の宿題は出されます。子どもも、やっと読めるようになった文字を、がんばって何回も読みます。保護者はそれを聞いて、日本語がわからなくてもハンコを押します。発音が正しいかどうか、どこで区切ったらいいかなど、親子ともわからないことが多いのです。

音読は、「正しく・はっきり・すらすら」を目標としているようですが、これはあくまで、小さい頃から日本語を聞いて、日本語の中で育った子どもを想定してのこと。一般的に、小学校入学時の子どもは6000ほどの語彙があるとも言われています。外国ルーツの子どもに、日本の子どもと同じやり方をさせていいはずがありません。それでも、子ども達は一生懸命、声を出し、宿題に取り組みます。意味が分からなくてもやるんです。その結果、しばしばこんなことが起こります。

・とにかく早く読もうとする。息が続かなくなったところで区切る。

・一文字一文字の音をただ声に出す。

・単語のまとまり、文の内容を理解しようとしない。

これでは、いくら音読の宿題に〇を付けたところで、読む力もつかないし、大切な内容理解も進みません。変な癖だけがついてしまい、定着するとそれを直すのは大変です。

大切なのは、内容がわかって楽しめること、目の前にいる子に合わせて、たくさん話しながら進めることです。また、言葉の習得には「聞く ⇒ 話す ⇒ 読む ⇒ 書く」の順序があります。日本語を母語としない子どもの音読にも、この言葉の習得順序に配慮した音読指導が必要です。

「かさこじぞう（小２）」

では、2年生の国語の教科書にある「かさこじぞう」を取り上げて、音読の実例を紹介します。これを参考に、それぞれの子どもに合わせてさまざまな工夫をしてください。

・絵本『かさこじぞう』を使います。絵だけを見て、ぺらぺらと一緒にめくります。文字は読みません。子どもの目が留まったらその場面について、いろいろ話しましょう。ここで、絵本に興味を持ってもらえたらまずは成功！ 子どもの気持ちの動きに合わせて、どこのページに飛んでもかまいません。

・すでに学校等で触れている場合には、「どういうお話？」とか「だれが出てくるの？」「へ～、雪がふってるんだ」などときっかけを作り、「教えて」という姿勢をしめすと、子どもは得意になって教えてくれます。「そりを引っ張ってるね。引っ張るとき、中国語ではなんていうの？」、「おじいさんとおばあさんは何してるの？」「あ、お餅ついてるの？」場面に応じて、いろんな会話をします。子どもはお話の世界にスーッと入っていきます。

・かさこじぞうでは、昔の物の名前や方言がたくさん出てきますが、ひとつひとつの説明をする必要はありません。話の全体の流れをとらえることが重要です。ひとつひとつの言葉がわかったからといって、ストーリーがわかるわけではありません。全体の流れがわかれば、知らない言葉や表現を推測し理解が進むものです。

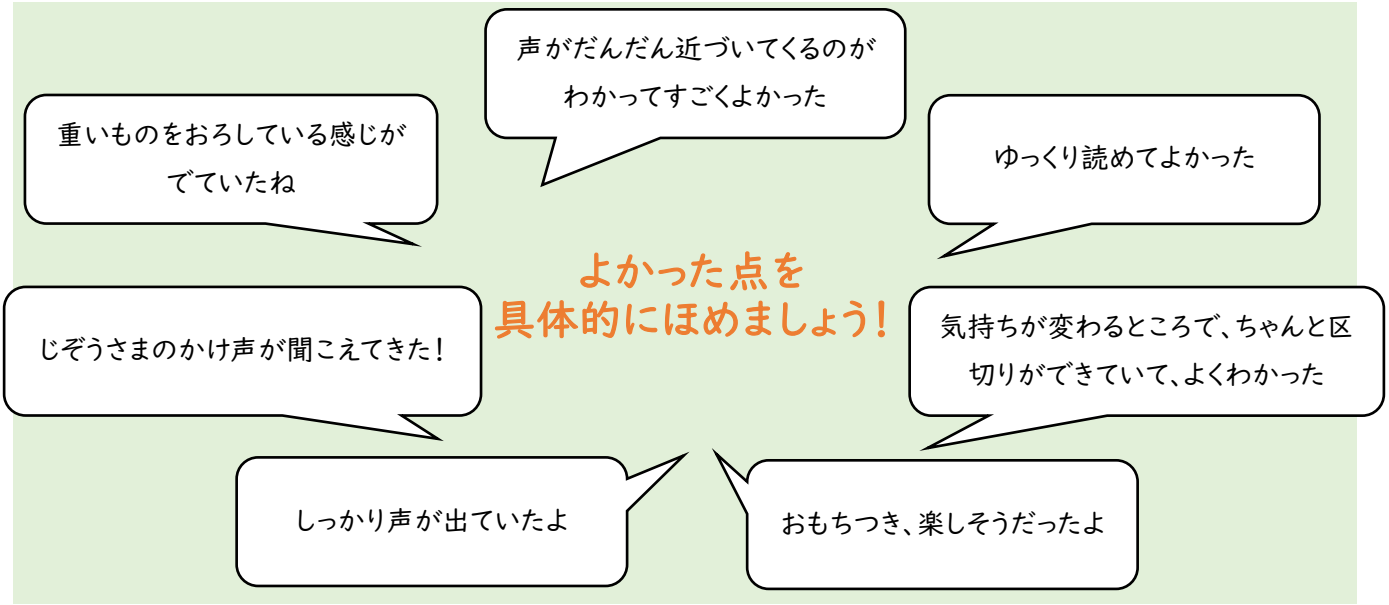
・一緒に勉強した Ｄ くんは、元気いっぱい音読していましたが、話していると、「じょいやさ」と「じいさま」「じぞうさま」の区別がついていないことに気が付きました。絵を見ながら、好きな場面をたどりながら、時には本文に入りながら、それとなく私たちが声を出して読みながら、全体のあらすじがつかめるようにしていきます。

・内容理解できたところで、”お話の気に入ったところだけ” 子どもが声を出して読んでみます。ストーリーを理解する必要はありますが、全文を読ませる必要はありません。

・じぞうさまの声が、だんだん近づいてくるところは、内容を理解したうえで、音読につなげるいい場面です。イメージを膨らませながら、いっしょに声を出します。

「じょいやさ、じょいやさ、じょいやさ、じょいやさ」

・じいさまとばあさまがお餅をつくまねをする場面、「ずっさんずっさん」と荷物を降ろす場面等も、一緒に声を出してみると理解が進みます。



・先へ先へと読みたがる子、一人で読みたがる子もいますが、そこは、役割分担をしたり、追っかけ読みをしたりと子どもが**聞く**機会が多くなるように工夫します。

・ストーリーが理解できていれば、好きな場面はどこかを聞くと、お話の一番大切なところと一致します。

・D くんは、六人のじぞうさまが空のそりを引いて帰っていく最後の場面がイメージできていました。またじいさま、ばあさまのその後のお話もし、とても楽しくできました。内容をイメージしながら読むことを身に着けると、機械的な文字読みはなくなり、他の文章を読む力もグンと伸びました。

　このお話は、2 年生の教科書に載っているものですが、他の学年の物語文でも内容を理解しようとしながら読む力を付けることが大切です。絵本は、子どもの興味に合ったものがたくさんありますし、勉強と違いリラックスして取り組めます。日本語指導や地域の中では、絵本を大いに取り入れましょう。

　可能であれば、読めるようになったところを担任の先生にお知らせして、授業の時、そこを当ててもらえるといいですね。みんなに感心されることは何よりも子どもの自信になり、音読が得意になり、日本語力につながります。

「みぶりでつたえる（教育出版　小学国語 1 下）」

　この単元は、外国ルーツの子にとって国語の勉強に入っていく良いチャンスになります。来日間もない子どもでも自分の気持ちや考えを伝えられ、クラスの友達ともコミュニケーションを楽しみ、子どもの活躍の場となり得ます。

　まずは教科書に入る前に、日常で自分たちがどのような身振りをしているか、またその子は日本とは違う身振りをしているか観察してみましょう。また言葉を使わずに、身振り手振りで伝えるゲームをし、伝わると嬉しいという体験が必要です。このようなステップを踏むと、外国ルーツの子にとって難しいと言われている国語であっても、クラス活動に参加できます。

同じ意味でも、日本と外国でみぶりが違うものもあります。またその逆もあります。それを外国ルーツの子どもに教えてもらったり、クイズを出してもらったりするのもいいでしょう。実際にみぶりで伝え合うことによって、日本の子にとっても楽しめる単元になるでしょう。

4−4. 日本語指導のヒント ～「しかけ」のある日本語指導へ～

用意された大量の練習プリントを見せられると、子どものやる気は一気に失せてしまいます。また、頭が動かないような単調な練習問題ではなく、「わかる」ことが楽しいと感じられる工夫が必要です。日本語指導というと、まずひらがなをやらなければならないと思っていませんか。ドリルやテキストを使わなければならないと思っていませんか。教材はドリル・プリントだけではありません。子どもの好奇心をかきたて、学習効果を上げるために、身の回りにある物や、興味のある物を活用する方法を考えましょう。

やらされたのではなく、気が付いたら夢中になっていたという「しかけ」、気が付いたら身についていたという「しかけ」が必要です。

★文字指導のヒント 「小さい本を作ってみよう」

A4 の紙に切込みを入れて、折るだけで小さな本ができます。

「むし」・「どうぶつ」・「のりもの」など、その子の好きなもので、その子だけの本を作りましょう。次のページにひとつ例を挙げましたが、目の前の子どもの好きなもので作ってください。カタカナのときも、好きなキャラクターなどにすると、楽しくできますよ。

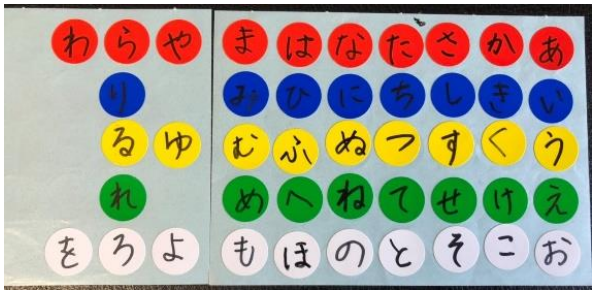
書くのではなく、まずはシールから文字を選んで貼ります。

文字の獲得は、**書けることより、読めることが先**です！ 読めない物を書いても意味がありません。

子どもにとってシールを貼るのは楽しく、これが、進んでやりたくなる「しかけ」になっています。またシールを使うと、一度使った文字が出てきた時に、「ない！」と気づきます。「ぞう」の「う」と、「しまうま」の「う」が同じ音だと気づきます。自分で気づくことが、「わかるって楽しい」ということにつながります。

この活動の中にひそませた「しかけ」

・自分の好きな物を通して、文字の認識ができて、読めるようになる。
・まだひらがなが書けなくてもできる。
・自分で完成させたという満足感を持たせる。完成度の高いものができる。
・もう一つつくろう！ という気持ちにつながる。
・シールの代わりに、書く練習に置き換えることもできます。



なまえ

の
ほん

★カレンダーで何ができる？

身近にあるカレンダーを使って、何を教えますか。日にち・曜日の言い方？ ただ、曜日の言い方や日にちの言い方だけを学ぶのではもったいない！ そもそも私たちはカレンダーを目の前にしてどんな会話をしているでしょうか。どんなことを話すときに、カレンダーを見ますか？

「誕生日はいつ？ 何月何日？」「あぁ、今年の誕生日は日曜日だね」

「日曜日はパパのお仕事が休みだから、一緒にパーティーができるね」

「でも、次の日が学校だから、宿題は土曜日にやっておいたほうがいいね」

「パーティーはどんなことするの？ 何食べるの？」

「じゃあ、土曜日にお買い物だね。ケーキ買う？ 作る？」

このようにカレンダーから自然な対話が生まれます。

一方、以下のような会話はどうでしょうか。

「今日は水曜日です。明日は木曜日です。昨日は何曜日でしたか。」

「金曜日の次は何曜日ですか」

楽しいですか？ 不自然だと感じませんか？ 外国語だからといって、こんな会話はおもしろくないですよね。日本語の勉強だからと言って、お互いがわかりきっていることを声に出しても、それは会話ではありません。

カレンダーにはこんな秘密も隠されています！

掛け算の 7 の段が難しかったら、カレンダーを見て何かに気づけるかもしれません。上から下で7の段、右下に下りていけば8の段、左下にいけば6の段の答えになっています。「おもしろーい！」と子どもが気づくといいですね。

7月　　2019 年

日	月	火	水	木	金	土
30	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31	1	2	3

終わったカレンダーが変身！
一緒にカレンダーを細く切ります。長いのや、短いの、太いのや細いの、いろいろな紙ができます。2枚の紙を交差させ引っ張り合って相撲をします。
「どっちが勝つ？」
「長いのと短いのどっちが強い？」「太いのと細いのどっちが強い？」「太い方が強い。」

日本語習得のために、「象とうさぎとどっちが大きいですか？」「象の方が大きいです。」のような、わかりきった会話をするのは、言葉の学びではありません。「どっちかな？」と子ども自身が考えることが学びにつながります。わかりきったことでは頭は働きません。もう一度やってみたいと思える繰り返しが言語の習得には必要ですが、このような工夫があれば、自然に繰り返し、興味を持って学んでいけます。
「短いのと、2 枚重ねたのと、どっちが強い？」
「半分に折ったら？」
もっと強くする過程で言葉が必要になり、言葉も獲得していけるのです。

他にも、カレンダーを「くしゃくしゃ」にしたり、「びりびり」破いたり、「ひらひら」ばらまいたり、オノマトペは、体験するとわかりやすいでしょう。丸めてボールを作って、「何回足けりできる？」「かごに入れられる？」ただ楽しいだけではなく、体験と言葉を結びつけることができます。

★コラム　どんなところにも「しかけ」

ある日の日本語教室でのできごと。そろそろ勉強が終わりの時間になるころ、ゆでたジャガイモがお皿にのって出てきました。
「たべる、たべる！」すぐに手が出てきました。
「ちょっと待って！」「これ、足りるかな？」
「子どもは何人」「6 人」「大人は何人？」「8 人」
「じゃあ、まず、子どもにひとつずつあげる？」「賛成！」
「1，2，3，4，5，6」「残りは何個？」
「4こ、大人は 8 人、どうする？」「半分ずつだよ」という声も。
「じゃあ、半分にしてみよう」「4 個が 8 個になった」と誰かの声。ひとつずつ渡して「わ～っ、ぴったり！！！」
ジャガイモを分け合って、とってもにぎやかな時間が終了。
ジャガイモさん、ちょうどいい数で協力してくれてありがとう！

「じゃがいもは学校にはないし…」じゃないんです！「食べ物」は確かに強い魅力を持っています。でも、ただ食べて終わることもできます。大人が均等に配ることもできます。みんなでどうしたらいいか、自分の意見を言う・聞く・考える・相談する、頭を動かす活動が大事です！ 算数の授業で足し算、割り算、分数などを勉強する前に、こんな体験をすることが必要です。言葉がけひとつで学習につながる「しかけ」になります。

まだ日本語がわからないからと言って、授業中、1 人でひらがなや漢字などを書き続けている子はいませんか。日本語がわからないからと言って、5 年生の子どもに 2 年生の算数ドリルをさせていませんか。

こういうことを続けていると頭を動かさず、手だけ動かし、それだけで先生に褒められることになります。子どもは褒められると嬉しいものです。「これでいいんだ」と頭を動かさない癖がつきます。ノートにたくさん書いても覚えていないし、意味や音とも結びついておらず、貴重な学びの時間が無駄になります。頭を動かさない癖ではなく、早いうちに「わかった！」「できた！」と勉強が楽しいと感じる癖をつけてあげましょう。

そのためには テキストを閉じて、目の前の子どもを見ましょう。たくさん話をしましょう。大切なのは、子どもの足りないところを見つけて、必要なものを探すこと。そして日本語が自然に身につけられるような方法や「しかけ」を考え、その子の未来につながるような「たね」をまくのが私たち大人の仕事なのです。

子どもの力を引き出す日本語指導には
「たね」も「しかけ」もあります。

第5章　多言語おはなし会

★おはなし会に至った経緯

　2010年にさいたま市の図書館で多言語による読み聞かせを始めました。はじめは南浦和図書館、その後、武蔵浦和図書館、大宮図書館と広がって、現在、保育園や図書館、チャレンジスクール等でも開催しています。最初に始めた図書館では毎回多くの親子が集まり、図書館のイベントとして、おはなし会は大人気です。

　ブックスタートなどもあり、子育てに絵本は欠かせないものですが、外国出身の人にとって、日本語で書かれた絵本を子どもと一緒に楽しむことはなかなか難しいことです。そこで、私たちは普段の教室活動の中で、よく絵本を活用していました。絵本を真ん中に置いて、内容を話し合ったり、それぞれの子育て事情を話し合ったり、さらに、参加している人の言葉で言ってもらったり、ママたちが自分の言葉を大切にしようと思うきっかけになったりもしました。ですから、日本語で書かれた絵本でも、その絵本を中心にして、ママたちが自分の言葉でお話できるのです。もちろん、おはなし会のためには絵と内容を選ぶ必要はありますし、その言葉にするまでに、たくさんのやり取りも必要です。

　そのような練習を経て実現したおはなし会で、ママたちは日本人親子をはじめとする観客の前で生き生きと自分の言葉で話し、観客も大きな拍手を送ります。

　子ども達はそんなママを見て、ママとママの言葉を誇らしく思う姿を見せてくれます。母語保持の支援はできませんが、子ども達がママの言葉や文化を大切に思う気持ちは育めます。さらに最近では手話や方言も言語のひとつですから、「多言語」の中に手話や方言も入るようになりました。その言葉を母語とする人が、自分の言葉で表現する時は、みんな表情が違います。自分の言葉って、自分の本質にくっついているものだと、気づくことができました。

　小さなおはなし会ですが、継続していると、図書館の多文化活動として協働していること、地域の人たちが観客として参加し、いろんな国の人が同じ地域で暮らしていることに気づくこと、ワークショップを通して会話の機会ができること、いろんな言葉で絵本に親しめること、外国出身者のその人らしさが発揮できる活躍の場となっていることなど、いいことづくめです。

★多言語おはなし会の紹介

　いろんな言語で、その国のお母さんたちにおはなし会をしてもらっています。

『挨拶絵本』

　いろんな言語ですぐにできます。学校でも試してみてください。（最初の数ページ）

朝は、「おはようございます。Magandang umaga.អរុណសួស្តី.Buenos dias.안녕하세요.」
昼は、「こんにちは。magandang hapon.អរុណសួស្តី.buenas tardes.안녕하세요.」
夜は、「こんばんは。Magandang gabi.អរុណសួស្តី.Buenas tardes.안녕하세요.」
人に感謝を伝えるときは「ありがとうございます。Salamat.សូមអរគុណ.Gracias.감사합니다」
そして、おわかれのときは「さようなら。Paalam.លាហើយ.Adios,에 의해 좋은.」

　朝も昼も夜も同じあいさつだとわかると、「あれ」という気づきから笑いがおこることもあります。また、どんなジェスチャーであいさつするか知ると、使ってみたい！ という気持ちになれます。

『わにさんどきっ、はいしゃさんどきっ』

わにと歯医者さんが会話する絵本ですが、同じセリフを言います。最初に話すわにを日本語で、歯医者さんを他の言語ですると楽しめます。

日本のわにさん・・・日本人が読みます
インドネシアの歯医者さん・・・インドネシア語で読みます。
「こわいなあ」「Menakutkan」
「どうしよう」「Apa yang harus saya lakukan」
わにさんも歯医者さんも同じことを言っているので、初めての言葉でも理解できます。

『おおきなかぶ』　　『はらべこあおむし』

みんなが知っている絵本を多言語でお話します。日本語をまぜる時は、日本人が読みます。

『おおきなかぶ』は、1年生の国語の教科書でも出てきますが、ウクライナの話です。ロシア語で読んでもらうと、日本語とは違うリズムの良さがとても楽しい絵本です。
『はらぺこあおむし』はみんなが知っているお話なので、初めて聞く言語でも楽しめます。全くわからずリズムを楽しむのもよいですし、読む前に、曜日や数だけを教えてもらうと、言葉を聞き取れる楽しさもあります。

どんな効果があるでしょうか？

え、何語だろう？

1．日本の子ども達が、いろんな言葉を知り、興味をもつ

日本語と英語しか知らない子が多くいます。他の言葉を聞いたことがないのです。学校では、ベトナムから来た子やフィリピンから来た子もいますが、ベトナム語やタガログ語を聞いたことがありません。日本では英語学習が盛んですが、言語に優劣はありません。世界にはいろんな言葉や文字があることを知るだけでも、日本の子ども達にとっては、視野が広がる第一歩になるでしょう。

みんなに喜んでもらえて嬉しい！

2．外国のお母さんが活躍し、自信を持つ

とても能力が高くても、外国から日本へくると、日本語ができないために、力を発揮できていない人がたくさんいます。いつも教えてもらう立場ではなく、教える立場になることで、自信へとつながり、生き生きと自分の言葉で語ってくれる姿を見ることができます。

僕、この言葉わかるよ！

私のママ、すごいでしょう。

3．外国ルーツの子が、自分の母語や母国に誇りを持つ

ある程度の年齢になると、自分のお母さんの出身国を隠したりお母さんの言語を友達に聞かれるのを嫌がったりすることがあります。本来であれば隠す必要も、恥ずかしいこともありません。むしろ自慢してもいいことです。でも、そんな機会がないのです。そんな中、図書館で自分だけしか知らない言葉が出てきたら、子どもの目はキラーンとします。自分のアイデンティティ、ルーツを誇りに感じることは、自己肯定感にもつながります。

「知らない言語だから、わからない。だから楽しくない。」ではなく、「知らない言語だから、わからない。でも楽しい。」と思える体験ができます。物事を見るときに「わからないから、つまらない」を「わからないけど、おもしろい」ととらえられる子どもに変わっていきます。英語がわかることだけがグローバルではなく、わからない言語でも興味を持って楽しめることがグローバルな人間と言えるでしょう。

おはなし会では、早口言葉や子守歌、手遊びなどもいろんな言語で紹介します。お時間があれば、ぜひ見に来てください!!（8月南浦和図書館　12月武蔵浦和図書館）

世界にはいろいろな言語がある。
「言葉って楽しい！」

第6章　やさしい日本語・やさしい学校

6－1．やさしい日本語

やさしい日本語とは、「易しい」と「優しい」の意味をもつ日本語のことです。簡単でわかりやすい日本語を話すために、いくつかルールがあります。

・難しい言葉を避け、わかりやすい言葉を選ぶ
・一文を短くする
・外来語や擬態語の使用をさける
・あいまいな表現、二重否定はさける
・・・などなど、いろいろありますが、細かいルールについては、「やさしい日本語」で検索してみてください。

「やさしい日本語」は面談のときや、連絡帳の記入には有効かと思います。が、子どもにとっては当てはまらない点も多々あります。例えば、難しい言葉でも学習で必要であれば覚えなければいけません。友達が話し方をコントロールして、外来語や擬態語を使わずに話してくれるわけではありません。

大人にとっての難しい日本語と、子どもにとっての難しい日本語は違います。さらには、日本・日本語に対する興味も違います。大人は、仕事や結婚など、日本に来た理由は様々ですが、自分の意志で日本に来ることを選んだはずです。しかし、子どもはどうでしょう。日本に行きたくなくても、国にたくさんの友達がいても、自分には決定権がなく、日本に行く以外に選択肢がない場合も多いのです。日本に住みたい、日本が好き、日本語を覚えたいという気持ちを持たずに来た子もいますから、いくら「やさしい日本語」で話しても、最初は抵抗して全く話さないことや、興味を示さないことも当然あるということを理解してください。

また「日本の当たり前」を「世界の当たり前」と思ってはいけません。学校の中には、当たり前がたくさんあります。それはあくまでも日本の当たり前です。つまり、外国ルーツの子にとっては、当たり前ではありません。4月から学校が始まることさえ、学校で給食があることさえ、掃除を子どもがすることさえ、当たり前ではないのです。「日本ではこれが当たり前」ではなく、「〇〇の国ではどうなの？」と聞いて、丁寧に教えてください。日本の子どもにも「自分たちの当たり前」が実はとても狭い考え方によるものだと気づくいい機会になるはずです。

また、勉強のときでも、例えば南米チリの子に、「トマトは夏の野菜です」という説明で、トマトの収穫量のグラフを見ても、南半球では季節が逆なので「8月が夏？　暑い？　トマト??」と混乱してしまいます。「パイナップルは暑い地方で作られます」といっても、日本では北が寒く、南が暑いですが、南米では南極に近い南が寒く、北が暑いのですから、こちらでも混乱してしまいます。これは日本の子にとっても学びのチャンスです。「じゃあ、チリでは太陽はどっちから登る？」と日本の子に聞くと、「西!!」と答える子がいるかもしれませんね。知識を文字や平面な教科の地図で得るだけなく、丸い地球をイメージし、宇宙規模の考え方ができるように、丁寧な説明すれば、外国ルーツの子どもだけでなく、日本の子どもにとっても学ぶことが多いはずです。

日本の当たり前は、世界の当たり前じゃない！

6−2．翻訳ツール

昨今、スマホのアプリやポケトークなど、さまざまな翻訳ツールがあります。旅行者や病院などでは有効でしょう。しかし毎日の学校で翻訳ツールを使うことは、メリットよりもデメリットが多すぎると感じます。
例えば、
・翻訳を待ち、日本語で理解をしなくなる。頭を動かさなくなる。
・間違った翻訳になっていても、誰もわからない。
・お互いの目を見て話さない。楽しくない。
・いつまでたっても、日本語ができるようにならない。

結局、上手に翻訳するためには、やさしい日本語で入力しなければいけません。複雑な日本語や、比喩表現、あいまいな日本語は、間違った翻訳や意味をなさない翻訳文になってしまいます。それなら、そのままやさしい日本語で話す方がいいのです。それがあることで外国ルーツの子が安心するなら、お守りがわりに保健室に置いておくだけという使い方がいいでしょう。

またどうしても必要で、翻訳ツールを使うときは、必ず逆翻訳をして、正しい意味が伝わっているかどうかを確認しましょう。いろんな翻訳機がありますが、その中でも「Voice Tra」や「google 翻訳」は無料で使うことができます。日本語から目的の外国語に翻訳し、さらにそれを日本語に再翻訳することで正しく翻訳されたかどうかが把握できます。もし、翻訳された日本語を見てまったく違う内容だった場合は、改めて違う表現で翻訳にかけ直す必要があります。必ず逆翻訳をして、きちんと意味に違いがないことを確認してから伝えることは絶対に必要です。

また、言語によってもかなり差があります。英語や中国語などの AI の学習量が多い言語や、韓国語のように文法が近い言語は、比較的正確に翻訳される傾向にありますが、クメール語やトルコ語、モンゴル語のように AI の学習量が少ない言語は、文法が近くても正しい翻訳がされない場合も多々あります。正しい翻訳のためには、何通りも解釈されるような日本語ではなく、誤解されない日本語での入力が必要となります。さらに主語をいれたほうが間違いが少なくなります。正しく使えるようになるには練習が必要です。

まったく日本語が話せない保護者にはそのような翻訳機はあったら便利です。しかし今後、日本で子育てしていくことを考えると、やさしい日本語でコミュニケーションをとることが必要になってきます。なるべく日本語を使って、会話をしていくことも必要となってきます。翻訳ツールは、たくさんの単語を知っています。しかし、絵やジェスチャーで、一生懸命説明をしてくれた、通じるまで説明してくれた「嬉しさ」は、人間が機械よりはるかに勝る点なのではないでしょうか。

★やってみよう 「子どもの気持ちになって」

「やさしい日本語」は、人によって違います。相手の気持ちを考え、相手に合わせて言葉を選ぶ必要があります。まずは「わからない気持ち」を体験してみましょう。

これは、バングラデシュのベンガル語です。

সাইতামা

この文字を下の五十音表を参考に読んでみましょう。

w	r	y	m	h	n	t	s	k		
わ ওয়া	ら রা	や ইয়া	ま মা	は হা	な না	た তা	さ সা	か কা	あ আ	a
	り রি		み মি	ひ হি	に নি	ち চি	し শি	き কি	い ই	i
を ও	る রু	ゆ ইয়ু	む মু	ふ ফু	ぬ নু	つ ৎসু	す সু	く কু	う উ	u
	れ রে		め মে	へ হে	ね নে	て তে	せ সে	け কে	え এ	e
ん ন	ろ রো	よ ইয়ো	も মো	ほ হো	の নো	と তো	そ সো	こ কো	お ও	o

by	py	j	gy	ry	my	hy	ny	ch	sh	ky	p	b	d	s	g	
びゃ বিয়া	ぴゃ পিয়া	じゃ জা	ぎゃ গিয়া	りゃ রিয়া	みゃ মিয়া	ひゃ হিয়া	にゃ নিয়া	ちゃ চা	しゃ শা	きゃ কিয়া	ぱ পা	ば বা	だ দা	ざ যা	が গা	a
											ぴ পি	び বি	ぢ জি	じ যি	ぎ গি	i
びゅ বিউ	ぴゅ পিউ	じゅ জু	ぎゅ গিউ	りゅ রিউ	みゅ মিউ	ひゅ হিউ	にゅ নিউ	ちゅ চু	しゅ শু	きゅ কিউ	ぷ পু	ぶ বু	づ যু	ず যু	ぐ গু	u
											ぺ পে	べ বে	で দে	ぜ যে	げ গে	e
びょ বিও	ぴょ পিও	じょ জো	ぎょ গিও	りょ রিও	みょ মিও	ひょ হিও	にょ নিও	ちょ চো	しょ শো	きょ কিও	ぽ পো	ぼ বো	ど দো	ぞ যো	ご গো	o

読めましたか？ 右から読むの？ 左から読むの？ 答えは書きません。読んでください。

次に、自分の名前を上の五十音表を見てベンガル語で書いてください。

どのくらい時間がかかりましたか？ 何回かいたら覚えられそうですか？

見たことのない文字を読むことや、文字を書くことは、簡単なことではないと感じていただけましたか。日本語だったら数秒でできることが、何倍もの時間がかかったのではないでしょうか。

日本に来たばかりの子ども、日本語がまだわからない子ども達は、このような体験を日々しています。「書いてあるからわかるでしょ」「読めばわかるでしょ」と言わないでください。すぐには読めないのですから。「まだ自分の名前も書けない」ではなく、書けるようになったことをほめてください。すぐには書けないのですから。

ひらがな、カタカナ、漢字と、日本の文字を読んだり書いたりすることは、最初はとても時間がかかることなのです。みなさんにとっては、「そりゃこのベンガル語は、日本語より難しいでしょ。無理無理。」と思うかもしれません。しかし、五十音表をよく見ると子音と母音の組み合わせになっており、日本の文字よりもよほど規則性があって覚えやすいのです。日本の文字は、音と形に関連がありませんので、一文字ずつ理屈無く覚えるしかありません。時間がかかるのは、当たり前だと思ってください。

そして、字を読んだり書いたりするのに時間がかかるといっても、能力が低いとか頑張っていないというわけではないのです。ただ、この文字を知らないだけなのです。今まで簡単にできていたことが、何十倍もの時間をかけなければできなくなるというもどかしさやいら立ちを感じている子ども達の気持ちを体験していただけたでしょうか。

子どもの気持ちを常に忘れないよう心がけましょう！

6−3. やさしいつもりの日本語

やさしい日本語の達人になるためには、日本語を客観的に見る力が必要です。丸と四角は、「丸い」「四角い」となるのに、三角はなぜ「三角い」とならずに「三角の」になるのか考えたことがありますか。また、「ここに車をとめてください。」と、「ここで車をとめてください。」の違いを考えたことがありますか。

ふだん話している日本語は、苦労せず自然に覚えた言語です。ですから、立ち止まって考える機会がありません。どの言葉が難しいのか、簡単なのか、一言ずつ考えて話しているわけではありません。外国の人にとって「やさしい日本語」を考えるには、日本語を客観的に「外国語」として見直してみるとわかりやすいです。

わかりやすいポイントは「はっきり、短く、簡単な言葉で、です。」

例えば、「地震発生により津波の恐れあり。高台に避難せよ」ではなく、「地震です。海はあぶないです。高いところに逃げてください。」・・・という例です。はっきり、みじかく、簡単に言っても、それでも難しいこともあります。「やさしいつもりの日本語」です。

きて

「きて」という、はっきり短い簡単な言葉でも、難しい場合があります。言語によっては、長音や撥音、促音の区別がないこともよくあります。日本語学習者は「来て」「着て」「切って」「聞いて」のどの意味か、ちょっと聞いただけでは区別ができないことがよくあります。ほんの少しジェスチャーを入れてあげるだけで、伝わる割合がうんと高くなります。

今、2階のトイレしか使えません。

これは、2階のトイレが使えるのですが、それを「使えません」という否定形で表しているので難しいのです。「2階のトイレが使えます。他のトイレは使えません。」と書いていれば、間違うことはないでしょう。「保護者しか入れません」「現金しか使えません」と書いていることはないですか？

遠足の集合時間は、9時15分前です。

何時に行きますか？ 8時45分か余裕をもって8時40分でしょうか。きっと9時にバスが出発するのでしょう。だから、その15分ほど前には来ておいてくださいという時間でしょう。さて、9時10分に来た子がいたらどう思いますか？25分も遅刻しました。先生は怒るでしょう。でも、9時10分は、9時15分の前ですよ。時間にルーズなわけではありません。言われた時間通り、9時15分の5分前に来たわけです。この子が悪いでしょうか。どうして「8時45分」と言わなかったのでしょうか。「8時45分集合です」と言えば、間違うこともなかったでしょう。自分の伝え方が間違っていなかったか、今一度、考え直してみましょう。

日本語でお願いします

ある南米出身の人は、日本に来て25年たちますが、今でも英語で話しかけられるそうです。日本語は堪能ですが、英語はできません。母語はスペイン語です。

例えばみなさんはフランスに旅行をしたときに、「你好（ニーハオ）」と言われた経験はありませんか。どんな気分だったでしょうか。もちろん、アジア系の顔をした人の中で中国人の可能性はかなり高いですし、日本人でも「ニーハオ」が「こんにちは」という意味は知っています。「ボンジュールでもわかるのに」と思いませんか。

これは、日本に住む外国出身者に誰かれ構わず「Hello（ハロー）」と言うのと同じではありませんか。特にアジア以外の出身者、北欧や南米出身者に対して、その見た目からこのような言葉をかける人がとても多いのです。もう何十年も日本に住んでいて、日本語で会話をしていたにも関わらず、最後に「グッドバイ、シーユー」と言われるのは、「日本語でも私の言葉でもなく、なんで英語？」と思うでしょう。相手の国の言葉を知らなくても、「さようなら、またね」という日本語でいいのです。

6−4. やさしい日本語の耳

伝える時の「やさしい日本語」だけでなく、聞く時には「やさしい耳」が必要です。相手が話している内容の本質を受け止めること、小さな日本語のミスにとらわれない寛容な心が必要になります。

次の会話、どうですか？

会話①

お母さん「先生、うちの子は学校でどうですか？ 家で、私のいう事を聞かない。勉強しない。でも、私勉強を教えることはできないですよ。先生、学校で見てください。宿題、お願いしたいですが、それできますか？」

先生「お母さん、日本語上手ですね～」

褒めているからいいというわけではありません。今は、日本語の評価を求めている訳ではありません。訴えがある、伝えたいことがあるので、真摯な態度で中身をよく聞いてください。

会話②

国から帰ったお母さんが、

「先生、私、先生のためにわざわざお土産を買ってきてあげました。嬉しいですか。ほしいですか。」と言ったとします。正直、少しムッとしませんか。でも、よく考えてください。わざわざ怒らせるためにお土産を買ってくる人がいるでしょうか。また、怒らせようと思ってこの日本語を言ったのだとしたら、かなりの日本語能力です。おそらく、「先生、先生が好きそうなものを買ってきました。喜んでくれると嬉しいです。」という意味だろうと、やさしい耳で変換してください。

会話③

このようなやり取りは、お母さん同士でもあります。

外国出身のお母さん「場所がわからない」

日本人のお母さん 「じゃあ、迎えにいってあげますよ。」

外国出身のお母さん「いいよ。あなたが迎えにきてもいいですよ。ありがとう」

こういう会話から、誤解が生まれ関係がうまくいかなくなることは少なくありません。普段から、関係ができていれば笑って注意することもできます。保護者との関係づくりも学校生活では重要なポイントです。

★コラム 「悪いのは誰？」

フィリピン出身の M さんは、日本の生活にも慣れてきたので、スーパーのパートに行き始めました。覚えることも多く難しいのですが、一緒に働いている人もやさしくて、楽しく働いていました。みんなが良くしてくれるので、お礼のつもりで、いつもみんなより10分早く行って、ロッカールームの掃除をしていました。数週間が過ぎたころ、いつもやさしい店長さんにこう言われました。「M さん、いつも悪いわね。」と。掃除をするのは悪いことだったのか？ 私が悪いって、何か盗むと思ってるの？ いつもやさしい店長に、笑顔で「悪い」と言われた。その日は、とても悲しい気持ちで過ごしました。

こんな誤解から人間関係が崩れたり、パートを辞めてしまったりするのは、お互いにとても残念なことですよね。「いつも、ありがとう」と言えば、何の誤解も無く、気持ちよく楽しく過ごせたのに。

彼女は、あとで仲の良いパートの人と話し、誤解も解け、持ち前の明るさで、みんなで大笑い。今日も元気に働いています!!

6−5．やさしい日本語の工夫

わからない言葉を説明しても、ゆっくり言っても、大きな声を出しても、わからないものはわかりません。伝え方を工夫してみましょう。

・例をあげる

「フィリピンの首都はどこですか？」「首都？何ですか？」と聞かれました。どうやら「首都」という言葉を知らないようです。「首都は、その国の一番大きな都市です。国の中心となっている都道府県です。国で会社や人が多いところです。えーっと、えーっと。」という説明では、ますます「首都」の意味がわからなくなります。「日本の首都は、東京です。フィリピンの首都は？」と聞くと理解しやすいです。

・選択肢を出す

「どこから来ましたか？」という質問がわからない様子。「ご出身は？ えーっと、国籍は？ お国は？ お里は？」と、どんどん日本語が難しくなっていることにお気づきですか？もう一度はっきりと言ってみましょう。「どこから来ましたか？」そのあとで、「フィリピン？ インドネシア？」といくつか国の名前を出しましょう。ああ、国のことを聞いているんだなと伝わるはずです。

・途中まで言う

住所を聞きたい場合は「さいたまけん、さいたまし、みなみく、ぶぞう？ねぎし？」と途中まで言います。
電話番号の場合も同様に「048の？」とか「090の？」と途中まで言えばわかりやすいです。

・ジェスチャーやイラストを利用

イラストはとても便利です。情報を多くせず、必要なものだけをイラストに書きましょう。上手な必要はありません。ジェスチャーは、「電話をかける様子」「車を運転する様子」など動作を表すものは伝わりやすいです。親指が「男」小指が「女」や、指を丸くして「OK」などは、国によって意味するものが違いますので注意が必要です。

やさしい日本語は
外国の人と一緒に学ぼう！

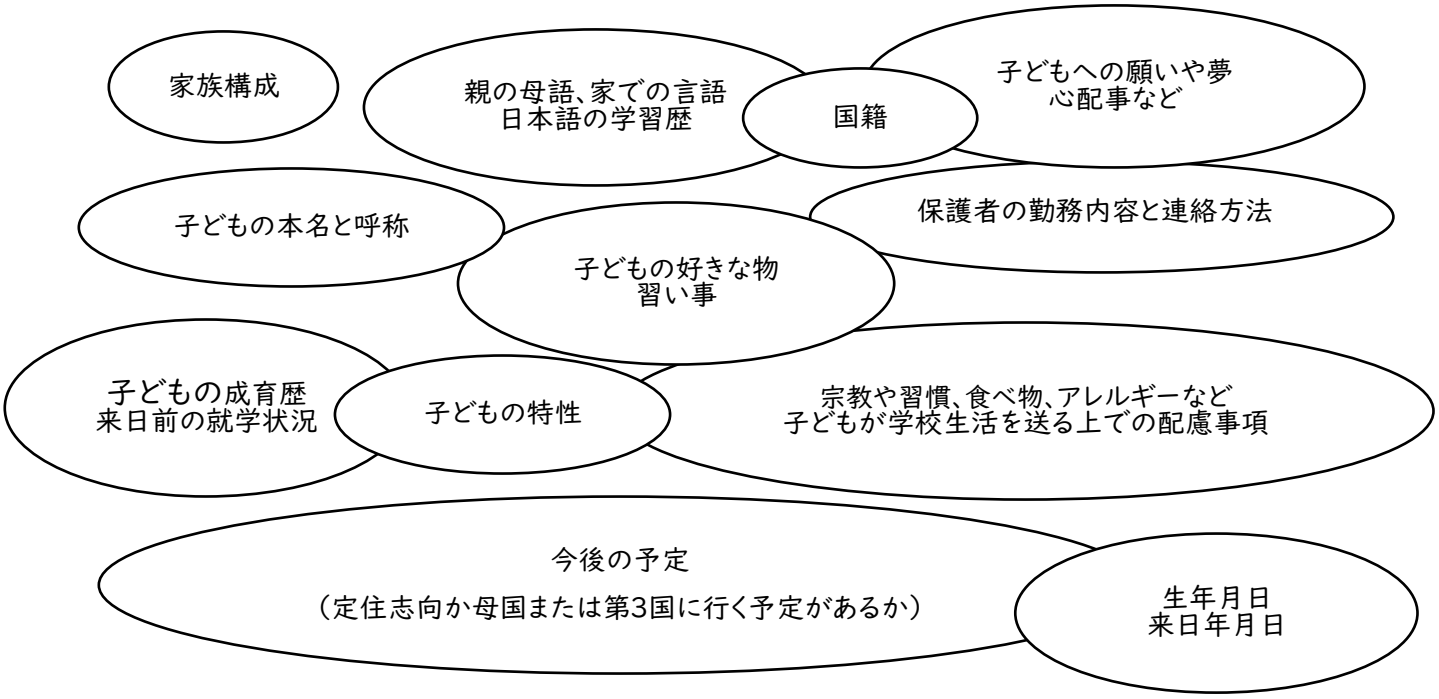
第7章　指さし会話帳～学校版～

外国出身の保護者にとって、最初の学校での面接は安心感を得たりや信頼関係を築く、とても貴重な一回です。最初の対応が丁寧で優しく感じがいいものであれば、日本語がわからなくても、「先生に聞けばわかる」「また来よう」「日本の学校も楽しそうだな」と思え、参観や懇談会などのその後の学校行事にも参加しやすくなります。逆に、この時の対応次第で、学校から足が遠のく可能性も大いにあります。最初の面接では、保護者の顔を見て、伝わっているかどうか確認しながら、話を進めましょう。

日本の学校に通った経験がない保護者には、日本の学校システムや学校文化を理解することは難しいことです。外国にルーツを持つ子どもが学校に転入してくる際に、どんなことに配慮しなければならないのか、また、保護者に何を説明しなければならないのか、考えてみましょう！

7－1．最初に確認しなければならないこと

外国にルーツを持つ子どもが日本の学校に転入することが決まった際には、その保護者が学校を訪れてくると思います。この機会を有効に活用し、日本の学校についてお知らせしたり、今後連絡が取りやすい関係を築いたりしましょう。その後は顔を見て話す機会はあまりないでしょうから、多少時間がかかっても、ここは丁寧にコミュニケーションをとる必要があります。



ここでポイント！

★会話をしながら聞いていく

上の○は連続性がある話です。まるで尋問のように、何の脈絡もなく、各項目について次から次に聞いていくようなことはやめましょう。まずは世界地図を見ながら保護者や子どもの出身地のことや、その国の挨拶などを教えてもらいながら関係性を築くことから始め、そこから保護者の話をよく聞いて、自然に話が進む順番で聞いていく

のがいいでしょう。

★出身や国籍、家族関係を聞くのは悪いこと？

日本人同士では立ち入った話はあまりしないので、国籍や家族関係の詳細を聞くことに多少、気後れするかもしれません。しかし、子どもの様子を見守っていく上では必要な情報となります。もちろん、保護者が答えたくなければ答えてもらわなくていいと思いますが、それが「いい」「悪い」ではなく、情報として知っておくことは大事だと思います。もちろんそれは守秘義務のある情報です。

★何を準備しておくといい？

外国出身の保護者が学校に来るということがわかったとき、何を準備しておけばいいでしょうか。話の内容理解に有効な絵やメモが書ける紙と鉛筆、前述した世界地図や、その国の様子がわかる本や図鑑などがあると、保護者の気持ちもほぐれ、話が広がります。

また最近では自動翻訳機の性能は上がっていますが、安易に頼らず、使う場合は「第6章やさしい日本語・やさしい学校」を参照してください。

★「説明した」は、「伝わった」とは違う

保護者に一方的に説明するだけでは、あとで「最初に説明したはずなのに伝わっていない…。」ということがよく起こります。「わかりましたか」と聞くと、わからなくても「わかりました」と大体の場合、答えます。本当に伝わったかどうかは「わかりましたか」で確認するのではなく、質問の仕方に工夫が必要です。やはりその時に必要なのはコミュニケーションです。例えば給食について説明したい時、まず保護者の国の学校でのお昼ご飯について聞いてみるのはどうでしょうか。そもそも給食がない国もあります。会話があれば保護者の国と日本の違いや、何がわかりにくいかも理解できます。時間はかかりますが、本当に伝わったかどうか確認するには必要な方法です。

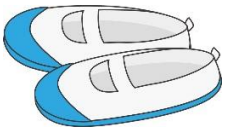
7−2. 学校に編入する際に必要な物 ～指さし会話帳・学校版～

たとえ日本語が堪能でも、日本で学校生活を送っていない保護者にとってはイメージのつかないことが多く、何語で説明されても難しいものです。日本の学校生活のことが具体的にイメージできるには、実物が一番です。この指差し会話帳・学校版を参考にし、それぞれの学校にあったものをそれぞれが工夫し準備してください。保護者や子ども達が日本の学校生活のスタートを気持ちよくきれるようにサポートしましょう。

指さし会話帳・学校版は、（株）情報センター出版局『旅の指さし会話帳』からヒントを得て作成しました。

（1）服装

小学校と中学校では、登下校の服装やかばんが違いますし、同じ小学生、中学生と言っても学校によっても違ってきます。また中学校では部活があり、その朝練があればまた違ってくるでしょう。目の前にいる子どもに適した情報提供をする必要があります。また、「体育着」や「体操服」、「運動着」など呼び方が何通りもありますが、保護者や子どもが混乱しないように、呼び名も統一しましょう。

	登校時	教室内	体育の授業
小学生	帽子、ランドセル 	うわばき・うわぐつ 体育館履き 	体育着・体操服・運動着
中学生	制服、かばん 		ジャージ

（2）学校生活に必要な物

学校生活に必要な物は、日本人には馴染みのある物・身近な物でも、外国人にとっては何のために使うのかわかりにくいものもあります。学校や学年、児童生徒によって違うと思いますので、適宜、目の前の子どもに必要なものを提示してあげてください。

下に挙げたものは例ですので、順番にすべて網羅して説明する必要はありません。何をするものなのか、どこで買えるのかなど、必要な物について話してください。

ふでばこの中身も決まっているの？
鉛筆の濃さは？

ふでばこ

「ネームペン」と「油性ペン」、同じもの？
同じものなら、統一した名前で言ってほしい！

クレヨン、クーピー、カラーペン

「クーピー」と「色鉛筆」は同じ？

連絡帳、連絡帳袋

連絡帳って、何のためにあるの？
この袋はなくてもいい？

教科書、ノート、ドリル

手提げは、横長？ 縦長？
なぜ横長がいいの？

手提げ

下敷きはソフト下敷き。ソフト下敷きって？
そもそも下敷きは何のために使うの？

下敷き・自由

子どもは給食を食べないでお弁当だけど、給食当番やるの？給食着もいる？

給食着、給食帽、給食袋、マスク、ランチョンマット、コップ、歯ブラシ、コップ袋

体育着（上・下）、体育着袋

上履き、上履き

のり、はさみ、セロハンテープ、道具袋

ぞうきんはタオルでもいい？

雑巾、洗濯ばさ

防災頭巾は、座布団？
何に使うの？

防災頭巾、頭巾カバ

粘土板、粘土

ピアニカ？ 鍵盤ハーモニカ？
これは買うの？
学校にあるものを借りるの？

ピアニカ

水着、帽子、スカートタオル

裁縫セット、全部、買わないといけないの？

そのほか、学年に応じて**算数セット**、**書写セット**、**リコーダー**、**裁縫セット**など。

ここでポイント!

★写真や絵より「実物」

　ここでは上記のように写真や絵で示していますが、保護者に説明する時には実物のほうがわかりやすいと思います。例えば「紅白帽」をどう説明しますか？ 保護者の目の前で帽子の色を変えれば一目瞭然です。

　また全員統一の規定の物ではない場合、例えば移動教室などで使用する手提げバックなどは、適切な大きさであればどんなものでもいいことを伝えるために、クラスに置いてあるクラスメートの子ども達のものを見せてもいいでしょう。手元にないものは、画像検索すれば学校で使用する物のイメージを共有することができます。

★どこで買える？

　給食着や体育着について、「どこで買うことができるか」というお店の場所や、「いくらぐらいかかるか」という値段についても保護者が知りたい情報です。あらかじめ準備しておいたほうがいいでしょう。

★時間割も確認

　教科書、ノート、ドリルを紹介する際には、実際の時間割を見ながら確認しましょう。この教科の時に必要な物は何かということを確認する必要があります。

★なぜそれが必要なのかも伝える

　例えば、給食着などは、なぜこれが必要なのか理解できない場合があります。そのためには日本の学校生活について説明する必要も出てきます。一日の流れ、一年の流れも確認しましょう。

7−3. 学校生活の流れについて ～事前に伝えたほうがいいこと～

　学校生活について理解できなければ、必要なものについての理解も深まりません。一日の学校生活、一年の流れが見通せないのは、子どもや保護者にとって不安なものです。

　以下の項目について、どうやって伝えればわかりやすく伝わるでしょうか。考えてみましょう!

・登校班
・休むときの連絡の仕方
・給食、掃除
・学校は何時から何時まで？
・連絡帳の存在
　「も（持ち物）」「れ（連絡）」「し（宿題）」「て（手紙）」「月曜セット」
・年間行事予定や、長期休暇の日程
・校則（髪型、ピアスなど）
・小学校で使用する引き出し（お泊りセット・持ち帰りセット）
・月曜日課、特別日課、集団下校、クラブ、委員会

ここでポイント!

★一般的な話ではなく、目の前の子ども・保護者の話を

　例えば、登校班による登校について説明する際には、「近所の子どもが集まって一緒に学校に行くこと」という説明をすると思います。しかしそれで終わるのではなく、実際にそのご家庭の住所をもとに、どこに何時に集合するのかなど、具体的な情報をお知らせすることが大事です。

★日本の当たり前は世界に通用する?

　学校が始まる時期が4月からという国は、世界の中では少ないようです。日本の当たり前は世界のあたりまではないことに注意して話を進めましょう。子どもに掃除をさせることはしない国もありますし、給食がない国もあります。

　そこで一日の学校生活を流れに沿って理解できるような写真があるとイメージが付きやすいと思います。また、運動会や卒業式など、年間行事などについても、前年度の写真などを見ながら話すとイメージが伝わりやすいでしょう。

★実際の場所に移動したり、写真などを活用したりする。

　「登校したら昇降口で靴を脱ぎ、上履きに履き替える」ということを伝えるにも、「昇降口」「上履き」という言葉はわかりにくいです。まず日本の学校では土足禁止であることも伝えなければなりませんし、その児童生徒のクラスの下駄箱がどこにあるのかも伝えなければなりません。そのためには、実際に一緒に見に行って確認するというのが一番わかりやすいでしょう。ただでさえ日本語がわからなくて不安な児童生徒です。教室にたどり着く前に何をどうすればいいかわからないという状況はあまりにも不安です。下駄箱やクラス、音楽室や体育館など実際の場所を見学し、「ここで勉強するのが楽しみ!」という気持ちでスタートさせてあげたいですね。

★相談できる場・質問できる人の存在

　給食費の支払い手続きや、安心メールの設定の仕方、体育着はどこで買えばいいかについてなど、相談できる人がいれば外国出身保護者は安心ですが、そういう人がいないケースも多いです。

　わからないときは、学校にも気軽に聞いていいということを伝えておきましょう。学校の先生だけでなく、他の保護者や地域のボランティア教室などにも聞ける人がいれば、ずいぶん楽になるはずです。すべての学校の手紙にルビをふったり、やさしい日本語版を別に作ったりするというのは、現実的には難しいと思われます。どんな難しい文章でも、聞く人さえいれば解決できるのです。

今日からいっしょに!
誰もが笑顔で学校生活が送れますように。

あとがき

私達は今まで多文化の親子と関わって来て、接する人の対応が子どもの成長や保護者の活躍に大きく影響するのを見てきました。私たちが受け取った大切なことをみなさんにも知ってもらいたいと思い、この本を書き始めました。

特に、外国ルーツの子どもの教育にあたる人たちは専門的な知識や技能は当然、必要です。それだけでなく、まず自分の目の前にいる子どもがどういう子どもで、どう接するかを考えられる力が大事です。そしてそれは子ども達だけではなく、保護者も含めた大きな観点で、そして長い視点でとらえていくことが大切です。

生活者としての外国人が増えている昨今、みんなが心地よく過ごせる地域・学校を作っていく時、ちょっとだけ視点を変えれば、いい方向に変わっていくでしょう。

「今日から一緒に〇〇！」、みなさんだったら何ができそうですか。「今日から一緒に勉強しよう」「今日から一緒に同じ地域の仲間になろう」「今日から一緒に楽しもう」。何でもいいのです。今日から一緒に何か始めましょう。そしてそのためには、彼らに関わる私たちが「今日から一緒に意識を変えてみよう」という気持ちがなければならないのです。

私たちは「今日から」という気持ちでスタートしました。はじめは隠れていた魅力が日に日に出てきて、教えてもらうこともたくさんありました。気が付けば何年も楽しい時間が過ごせています。

外国ルーツの子ども達一人ひとりが持っている多様性を活かし、関わる私たちが連携して、子ども達が日本社会で活躍できる環境を作っていきましょう。

いろいろな意味が取れる『今日からいっしょに』、是非、ご活用いただければ嬉しいです。

日本で暮らす子どもたちみんなの健やかなる成長を願って…

髙柳なな枝
井上くみ子
芳賀　洋子
五十洲　恵
地球っ子グループの仲間たち

編集後記

教材作成過程は、今までの自分の活動を振り返り、反省し、新たな気づきが生まれた時間でもありました。

かつて、ママは日本語が通じないからと目の前の子どもにだけに必死に向き合っていました。文字を覚えさせることで指導が成功したと思っていました。指導本を何冊も読み漁りました。それだけでは思うような指導ができず、ヒントを探していろいろな講座に参加しました。

そんな時に地球っ子グループに出会って、目からうろことはこのことだと思いました。ここには楽しい主体的な学びの場があり、子どもも親もスタッフもいきいきと活動しています。互いに尊重し合い、一人ひとりの子どもとしっかり向き合う。親と向き合う。仲間とつながる。そして一緒に楽しむ。みんな笑顔でいっぱいです！ その様子は本書からも感じていただけると思います。（五十洲恵）